

伝金弘道筆『平生図』の「観察使赴任図」を読み解く

—朝鮮時代の官吏赴任行列図の文化的諸像—

金 貞 我

KIM Jeong Ah

非文字資料研究センター元研究員

神奈川大学経営学部非常勤講師

【要旨】本稿は、伝金弘道筆『平生図』の一扇に描かれる「観察使赴任図」を取り上げ、観察使の赴任及びそれを取り巻く文化的諸像を考察するものである。『平生図』は朝鮮時代の理想的な士大夫の一生を吉祥のモチーフとして図解したもので、「観察使赴任図」は、図の主人公が官職に就き、出世していく過程の中でも地方官として最も品階の高い観察使として赴任する行列を描いたものである。

朝鮮時代に制作された行列図は、様々な主題の図の中に描きこまれ、多数の作例が現存する。それを主題別に分けてみると次のように分類できる。①班次図を中心とした王室の行事に関わる行列図、②中国や日本との外交行事に関わる屏風絵や画帖に描かれた行列図、③実存した人物の地方赴任を描いた行列図、④都市図の中に描かれた不特定の官吏赴任図などである。

中でも、いわゆる都市図の中には、平安監司（平安道観察使）の赴任を描き込んだ作例が少なくない。「平壤図」に描かれる壮大な赴任行列は、観察使赴任に関わる普遍的な赴任行列のイメージとして定着した。伝金弘道筆『平生図』の「観察使赴任図」は、実存した人物の履歴を取り上げた図ではないという意味では、都市図の中の官吏赴任行列図に近似する。

「観察使赴任図」の個々の図像を詳細に分析してみると、行列は前陪裨将→教書と諭書→節と鉞→司令旗・金鼓旗→吹鼓手と細楽手→棍杖と朱杖→令旗→観察使の双轎→後陪裨将と監營の吏員、の構成を為している。国王の権威を象徴する教書と諭書、節と鉞が描かれ、図が観察使の赴任行列であることを明確にしている。また、軍事統帥権を有する観察使の威厳を表す司令旗も描き込まれている。特に、教書筒と諭書筒は、行列の主人公が国王の命令を受けて赴任する観察使としての威厳を象徴する重要な機能を持つ。

都市図の行列図の中には、五里程（赴任地から五里離れたところの客舎）で新迎を受けたあとの壮大な「新迎」行列図を描いたものが多く、東西南北を示す黄白青紅旗が立ち並び、数々の将官と吏員、吹鼓手と細楽手や大勢の妓女が登場する。それに対し、『平生図』「観察使赴任図」は行列の構成からみて、丁若鏞（1762-1836）の言う「啓行」の行列を描いている。即ち、図は、観察使一行が都の漢陽を発ち、赴任地の五里程に到達する前までの行列を描いた観察使の「啓行」の行列図として注目されるべきである。

An Image-reading of the Picture of *Newly-appointed Governor's Procession* in *Pyongsaeing-do* Attributed to Kim Hong-do in the Joseon Period, Korea

Abstract : This paper is about *the Picture of Newly-appointed Governor's Procession of Man's Ideal Life, Pyongsaeing-do*, discussing the governor's procession, and the cultural aspects

surrounding it. *The painting of Man's Ideal Life, Pyongsaeing-do* depicts the images of the glorious rite of passage and successful life of bureaucrats, among them *the Picture of Newly-appointed Governor's Procession* illustrates the scene of a governor who was considered the highest rank of provincial official during the Joseon Period, describing the main figure in *Pyongsaeing-do* is successfully promoted to the position of the governor.

Indeed, the pictures portraying processions of officials appear in the various genre of paintings during the Joseon Period, many of which are still preserved to this day. In terms of the theme, these pictures can be classified, as following: First, the painting of royal events, especially *Bancha-do*, depicts a parade in the court rites, featuring details of the cortege of countries, royal guards in the parades, the ceremonial flags, and banners. Second, processions of diplomatic affairs with Ming China and Japan remain in the albums and the screen paintings. Third, the processions of the appointment ceremony of the several existed bureaucracies are represented in the scroll paintings and in the hanging scrolls. Forth, the unspecified governors' processions are depicted in the urban genre paintings specifically in the paintings of *Pyongyang*.

Among those paintings, principally among the so-called the urban genre paintings, not a few *Pyongyang-do* represents the spectacular scene of governors' procession which had created the popular images of the governors' procession at the time. In terms of it, the characteristic of *the Picture of Newly-appointed Governor's Procession of Man's Ideal Life*, is similar to the image of *Pyongyang-do*.

Based on the precise examination of the depicted the motifs and figures, it is clarified the parade of the governors is composed as this order: the front guard → *gyoseo* (教書) and *yuseo* (諭書) which are the types of written orders from the king → *jeol* (節) and *wol* (鉞) which are the ceremonial weapons given by the king → *saryonggi* (司令旗) and *gumgogi* (金鼓旗) which are large military command flags → *chwigosu* (吹鼓手) and *saeaksu* (細樂手) which are the two types of military bands → the cudgels and the vermilion canes → the militarily order banner → the commander' flags → the governor and the sedan chair borne by two horses → the back guard and the provincial officials and retinues. Among them, *gyoseo* and *yuseo*, *jeol* and *wol* are directly given to the governor as a symbol of the royal authority delegated to the official.

The representation of governors' procession from most of the urban genre paintings, especially *Pyongyang-do*, portray the spectacular and brilliant parade which is, because the procession is done after the welcoming ceremony held in the *orijeong*, a guesthouse 2km from the provincial border. In this welcoming ceremony and procession, many military officials holding various colors of banners which symbolize the four directions, officials of the provincial office, provincial bands and provincial courtesans participate, and march from *orijeong* to the provincial office. This procedure is called *chinyong* (新迎). In comparison to this, *the Picture of Newly-appointed Governor's Procession of Man's Ideal Life*, is rather simple in details, although the most symbolic motifs such as *gyoseo* and *yuseo*, *jeol* and *wol*, *saryonggi* are distinctly illustrated. This procession which is rarely found in the illustrated materials, according to JEONG Yaggyong (1762-1836), represents the procession of *kaehaeng* (啓行) which describes the marching from the capital of Hanyang to an *orijeong* of the province.

はじめに

本稿は、伝金弘道筆『平生図』の一扇に描かれる「観察使赴任図」を取り上げ、観察使の赴任及びそれを取り巻く文化的諸像を考察するものである。考察の対象となる伝金弘道筆「平生図」は、「慕堂洪履祥平生図」とも呼ばれる8曲一隻の屏風絵で、慕堂洪履祥（1549-1615）の一生を絵画化したものとして知られる伝金弘道筆「慕堂洪履祥平生図」の複本である（図1、以下、「観察使赴任図」と称する）。二つの平生図は、図の構図や人物の細かな部分において一致している。



図1 伝金弘道筆「平生図」8曲 国立中央博物館蔵 ソウル

しかし、近年の研究により、「慕堂洪履祥平生図」は後代に付された画題であり、洪履祥の一生涯に基づいた絵画ではなく、朝鮮時代の理想的な士大夫の一生を、吉祥のモチーフとして図解したものであることが明らかになった。⁽¹⁾ その構成は初誕生の祝いからはじまり、婚姻儀礼、科挙及第を象徴する三日遊街、そして重要な官職に順次就き、立身出世していく過程を描き、最後は大勢の子孫の祝福を受けながら回婚礼を挙げる図で締めくくられる。「観察使赴任図」は、図の主人公が官職に就き、出世していく過程の中でも、地方官として最も品階の高い観察使として赴任する行列を描いたものである。⁽²⁾

朝鮮時代に制作された行列図は、主に国家行事として描かれたものが多い。例えば、次章で取り上げる班次図がある。班次図は宮廷の行事を班列の順序によって図や文字で説明し、図式で表したもので、数多くの作例が現存している。国家や王室の行事の他に、朝鮮王朝の外交儀礼を主題とした作例

も存在する。東萊府使が倭臣を接待する場面を描いた屏風絵「東萊府使接倭使図」や国立晋州博物館所蔵の「東萊府使接倭使図」が現存している他に、明に向かう奏請使の行列を描いた画帖もある。また、私的な記録ではあるが、「安陵新迎図」は安州牧使の赴任行列を詳細に描いており、注目される。他に平壤を描く都市図の中にも観察使の赴任を描いたものが少なくないが、その殆どが赴任地の境界で新迎儀式を受けた後の赴任行列を描いている。その点では、伝金弘道筆『平生図』の「観察使赴任図」は、国家行事の行列や実存した人物の赴任行列を描いたものではなく、不特定の観察使が赴任する行列を描いた図像資料であるといえる。

朝鮮時代の観察使や守令など地方官吏の赴任については、王朝実録の記録や、官吏の日記などを資料とした研究が多数存在するが、実際に地方に赴任して行く官吏が、漢陽から一体どのような行列を組み、赴任地に向かっていったのかについては、未だその疑問に答えた研究はない。その中で、図像資料の活用を文化研究の新たな方法として、「観察使赴任図」を最初に取り上げたのは、『東アジア生活絵引—朝鮮風俗画編』(以下、朝鮮時代生活絵引と称する)であった⁽⁴⁾。本稿では「観察使赴任図」を分析する過程で、『朝鮮時代生活絵引』の研究成果を踏まえながら、また、新たな知見を加えたい。そして、「観察使赴任図」の詳細な分析に導かれながら、図の新たな解釈を基に、朝鮮時代の観察使赴任の在り方を考察する。

そのために、まず、朝鮮時代に制作された行列図を取り上げ、概観する。近年、日本においても朝鮮時代後期の行列図を紹介した論考が発表され、その先学の研究においては、ごく限られた作例が取り上げられ、しかも、地方官の赴任行列図は、安陵(現在の平安南道安州)への守令赴任の様子を描いた「安陵新迎図」のみ現存すると認識された⁽⁵⁾。意外にも、朝鮮時代の行列図はあまり知られていない。そのため、本論では、まず、朝鮮時代に制作された行列図を、①王室の行事に関わる行列図、②外交行事に関わる行列図、③官吏赴任行列図、そして④都市図の中の官吏赴任行列といった主題別に分けて概観する。その過程で、資料としての「観察使赴任図」の特色が浮かび上がってくると思うのである。さらに、「観察使赴任図」について次の2点に考察の焦点を合わせたい。まずは、「観察使赴任図」に描かれた個々の人物と事物の詳細な読解であり、次に、「観察使赴任図」は赴任のどの路程を描いたものなのかについて分析を加え、「観察使赴任図」が発信する文化の諸像を具体的に取り上げていきたい。

I 朝鮮時代の行列図と「観察使赴任図」

(1) 王室の行事と関わる行列図

まず、朝鮮時代に制作された図像資料の中に、どのような行列図が現存しているのか、また、「観察使赴任図」はどのように位置づけられるのか、朝鮮時代に制作された行列図について、概観しておきたい。

朝鮮時代に制作された行列図と言えば、最初に思い浮かべるのが班次図であろう。班次図は、国家や王室の儀式を遂行するために必要な器、服飾、儀仗物、建築などを図もしくは文字で示し、また人物と事物の行列を視覚的に表し、記録したもので⁽⁶⁾、膨大な数の作例が残っている。班図ともいい、一面に官員の位次を表した排班図、文字で構成される文班次図、そして絵で表した班次図を含む。班次

図は、国家や王室に大きな行事があるときに、行事を記録として残す儀軌（国家と王室の行事を記録した書物）に収録されることもあるが、初めから儀軌の付随する図版として制作されないものもある。⁽⁸⁾ 実際、現存する 627 種の儀軌に 170 種の班次図が伝わり、儀軌の約 25 パーセントに班次図が収録されている。⁽⁹⁾ 班次図は王室儀礼に礼貌と威儀を備えるために、儀式の前に制作され、国王の裁可を得て儀式に活用された後、儀軌に収録され、秘蔵された。⁽¹⁰⁾

班次図が収録されている儀軌は、嘉礼（王室の婚礼）、国葬、王世子冊礼王（世子に冊封される時の儀式）、尊崇（尊号時の冊と宝を持った行列が宮殿に向かう儀礼）、祔廟都監儀軌（3 年葬を終えた王や王妃の位牌を宗廟に安置する儀節を記録した儀軌）、影幀模写都監儀軌（歴代王の肖像画を制作する際の儀節を記録した儀軌）、宗廟（永寧殿）修改儀軌などである。⁽¹¹⁾⁽¹²⁾

班次図は、前述したように、官員の位次を表した排班図、文字で構成される文班次図なども存在するので、必ずしもすべての班次図が行列図として制作されているわけではない。例えば、1747 年以降、仁元王后（肅宗の継妃、1687 - 1757）に尊号の冊文と宝印を捧げた儀式を記録した 4 種の儀軌に登場する「儀仗図」がそれである。人物は描かれず、儀仗物のみが描かれている班次図である。⁽¹³⁾ このように、班次図 = 行列図であると定義はできないが、多くの班次図には王室の儀礼に関わる行列が描写されているので、朝鮮時代に制作された行列図と言え、真っ先に班次図を思い浮かべるのはその所以である。⁽¹⁴⁾

その中で、行列を描く図絵の班次図は、主に行列の主人公である輿を中心に侍衛軍卒、儀仗旗と楽隊、陪従官員など、定まった位置と順序を描写したものである。班次図には、国王と王室に関わる複雑な条目を施行するにあたって、失儀しないように、前もって班次図を制作し、国王に奉る報告書の役割もしたが、それを御覽班次図もしくは内入班次図と言った。⁽¹⁵⁾

作例として「英祖王世弟冊礼時班次図」（1721 年、国立古宮博物館蔵、図 2）と「華城園幸班次図」（1795 年、ソウル大学校奎章閣蔵、図 3）が挙げられる。

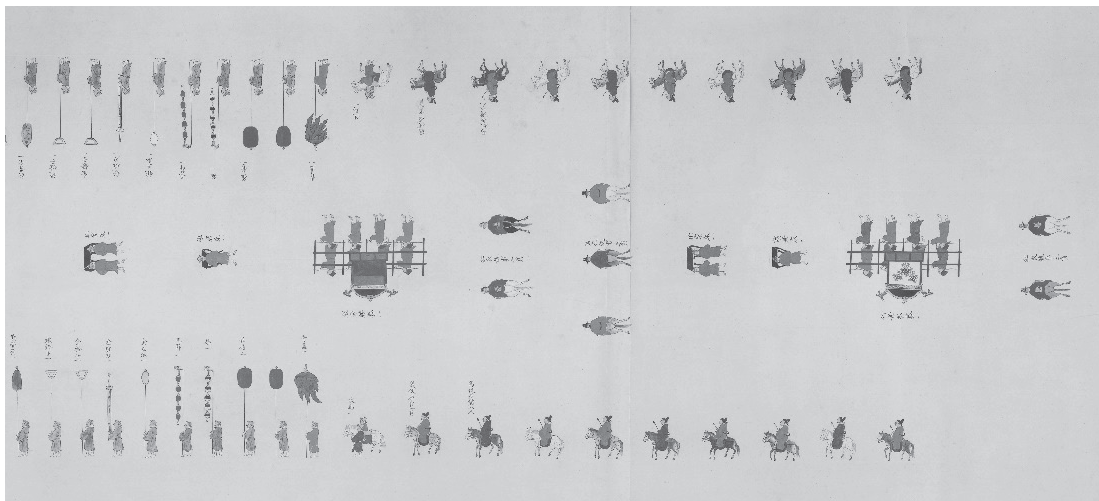


図 2 「英祖王世弟冊礼時班次図」 1721 年 部分 国立古宮博物館蔵 ソウル

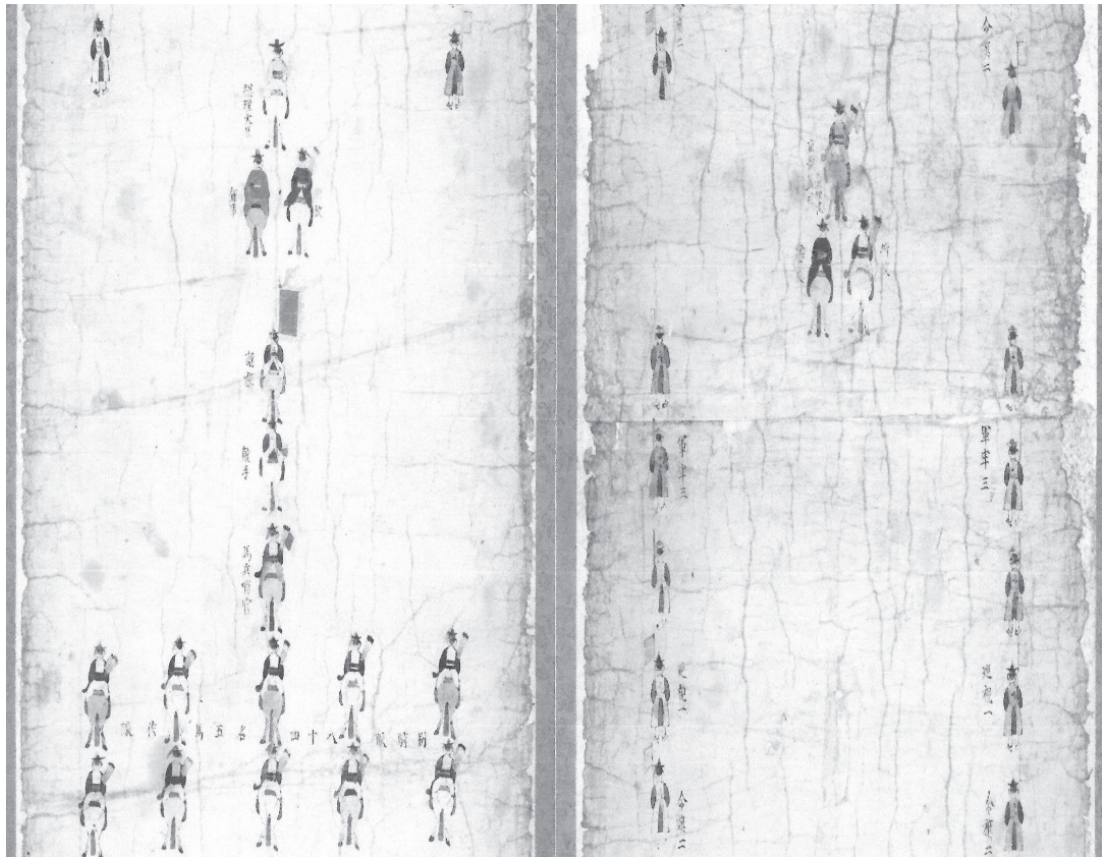


図3「華城園幸班次図」 1795年 3面 ソウル大学校奎章閣蔵

この2点の作例は、いずれも卷子本の行列図で、前者は650センチ、後者は、1536センチに至る。御覧班次図もしくは内入班次図を見て、儀節の誤謬を正し、それを実際に行われる儀礼に反映し、また、儀軌に収録する班次図の制作にも是正された内容が載せられた。⁽¹⁶⁾ 儀軌班次図は、儀礼が終わった後に儀軌を編纂する際に画員が配置され、班次図の制作を担当し、儀軌に収録した班次図である。儀軌班次図は儀軌が線装本という装丁の形態であるため、儀軌と同じく線装本であるが、長い行列を描いている場面が多いため、各面の図はつながっている。

班次図の表現様式の特徴は、17世紀半ばまでは、速筆で自由に筆写し、個々の画員画家の筆力に左右される傾向があったが、17世紀後半になると、左向きにして前進する中央列の輦や輿と担ぎ手は左向きにし、前進する人と馬は前進する方向に向かって横たわって後ろ姿で、輦や輿の右側の列は中央列に顛倒された、複合視点で描写する三段構図⁽¹⁷⁾（図4）が定着した。また、数千人にのぼる登場人物と馬などの制作量の負担を減らすために幾つかのパターンを印刻し、押す技法が導入された。印刻彩色法と呼ばれるこの技法は、判子のように人物を押し、帽子や持ち物などは手で描き、彩色を施す方法である。⁽¹⁸⁾

班次図が飛躍的に増加したのは、国王の嘉礼（1759年、英祖と貞順后嘉礼都監儀軌に収録された班次図）と王世子嘉礼（1819年、孝明世子嘉礼班次図）の記録のために、班次図の制作が急増したことによる。また、朝鮮時代の王室は早くから国葬のとき、発軻行列を重視し、国葬（礼葬）都監儀軌には国王、王妃、世子（東宮）、世子嬪などが宮殿の殯殿での国葬儀式を終えた後、山稜に向かう発軻（出棺）の場面を描いた班次図が多く制作された。⁽¹⁹⁾

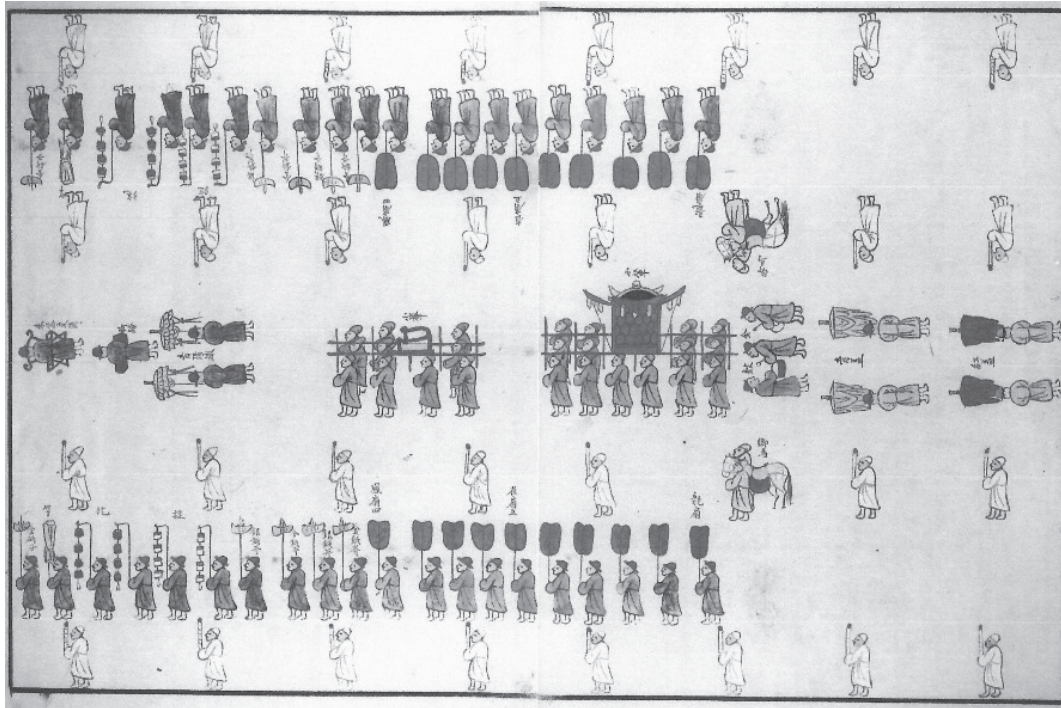


図4「孝宗国葬都監行儀軌」 1659年 265面 ソウル大学校奎章閣蔵

行列図としての班次図が特に注目されるのは、国王の行幸を描いた行列図である。英祖（在位1724 - 1776）、正祖代（1776 - 1800）には、他の代に比べても行幸の回数が圧倒的に多く、国王の行幸を伴う班次図の制作も急増する。国王の行幸は、班次図の行列をより荘厳で大規模なものにさせ、王室儀礼の中心を為す国王の存在を際立たせようとした。1759年、英祖と貞純王後の嘉礼には国王の親迎の行列が登場するが、それを図写した『英祖貞純王后嘉礼都監儀軌』『新迎挙動班次図』（フランス国立図書館蔵、国立中央博物館保管、図5）は、面数が50面と飛躍的に増えたのである。このと

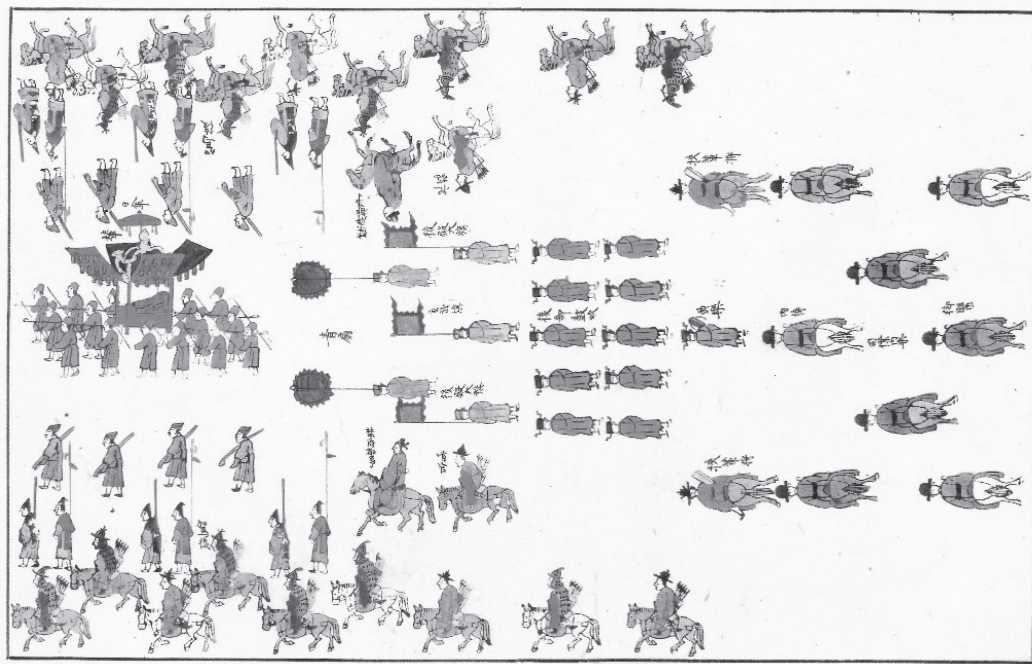


図5『英祖貞純王后嘉礼都監儀軌』『親迎挙動班次図』 1759年 部分 フランス国立図書館蔵、国立中央博物館保管 (신명주『66歲英祖, 15歲新婦를 맞이하다』, 효형출판, 韓国, 2001年所収)

きから詣闕（参内）の行列に国王の輿と王妃の輿が登場し、それを侍衛する大行列が構成された。以降、再び嘉礼班次図に国王が登場する 19 世紀になると、国王の乗った輿とその前後の侍衛の軍容がさらに強化され、壮大な行列を為すようになる。18 世紀に国王の權威の強化と直結した様々な行事に国王が積極的に行幸したことにより、王室の行事を記録した班次図にも変化が起きたのである。⁽²¹⁾

英祖代に随駕及び新迎に登場した国王の行幸行列図は、さらに正祖代においても活発に制作された。特に、正祖の行幸の中に最も大きな比重を占めたのは陵行であり、正祖は、在位中に行われた 607 回の行幸の中で、陵行のみで 123 回にもものぼる。⁽²²⁾中でも最も規模の大きい行幸の行列として注目されるのが、1795 年（正祖 19）に行われた生父の顯隆園への陵行であった。正祖は、還曆を迎えた生母恵慶宮洪氏と共に生父莊献世子（1735 - 1762）の園所（王世子・王世子嬪、王室の親戚の墓）を参拝し、華城行宮で恵慶宮のために盛大な還曆の宴を開き、祝ったが、華城への往復路における行列図と共に行事のすべての様子を『園幸乙卯整理儀軌』「班次図」として残している（図 6、7）。

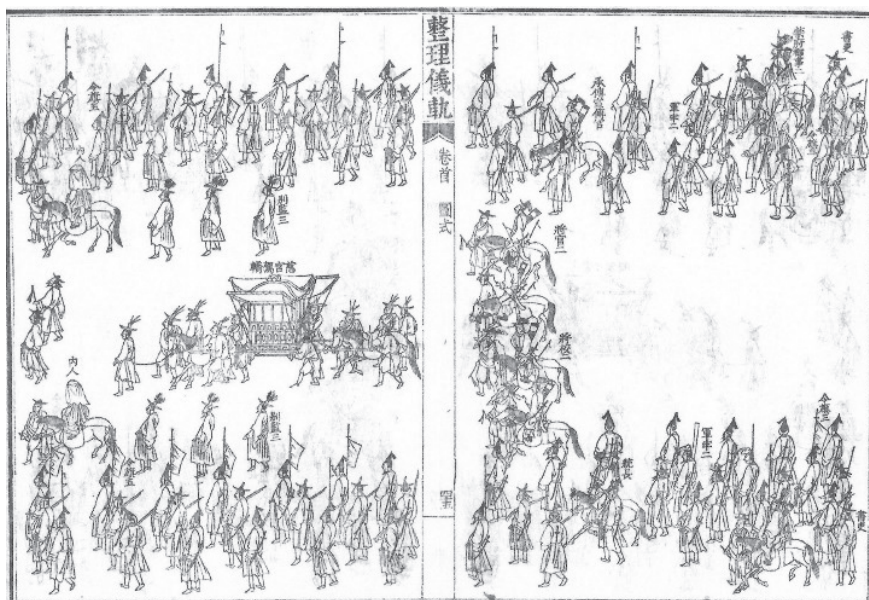


図 6 『園幸乙卯整理儀軌』「班次図」 1797 年 49 面 ソウル大学校奎章閣蔵



図 7 『園幸乙卯整理儀軌』「班次図」 1797 年 56 面 ソウル大学校奎章閣蔵

行列の中の国王は戎服（軍服）を着用し、侍衛、扈從する官員もすべて軍服姿で描かれ、行列は軍隊の行列のように編成されている。実際の行列には 6,800 人余りの官員と 1,000 頭以上の馬が動員されたが、班次図には 1,490 人余りの官員と 520 頭程の馬が登場し、各面をつなぐと、10 メートルを超える壮大な行列になる。表現様式においても、既存の複合視点を採用せず、俯瞰視を一貫して適用し、写実的に描写しようとしている点が特徴である。この『園幸乙卯整理儀軌』「班次図」は、版刻で 100 点以上の複製が作られ、国王の盛大な行幸を象徴する行列図として、王室以外の民間でも閲覧できることとなった。⁽²⁴⁾

19 世紀に入ると、純祖（在位 1800 - 1834）と憲祖（在位 1834 - 1849）年間は、王権の弱化和外戚の独占政治、不安な社会の情勢で特徴づけられる。摂政を行った王大妃（前王の妃）たちは微々たる王権の存在感を強調するために、若い国王の嘉礼に軍士を動員し、盛大な嘉礼の行列を編成した。班次図に描写された行列は大幅に長くなり、造形的にも完成度が高く、さらに優れた水準に達する。⁽²⁵⁾ この時期の純祖嘉礼の親迎行列（図 8）は英祖の親迎に配置された前・後廂軍（王の護衛部隊で、行幸のときに編成される）の 400 人より 10 倍も超える 5,000 人が動員された。⁽²⁶⁾ 制作技法は、印刻技法が取り入れられ、行列を為す大勢の人物と事物を一体化した印刻、例えば、輿と輿かきと一体化した印刻、儀仗旗の印刻、一体型の神輦の印刻など新たな印刻技法が大幅に増え、活用されたが、『園幸乙卯整理儀軌』「班次図」のような写実的な俯瞰図の技法は踏襲していない。⁽²⁷⁾

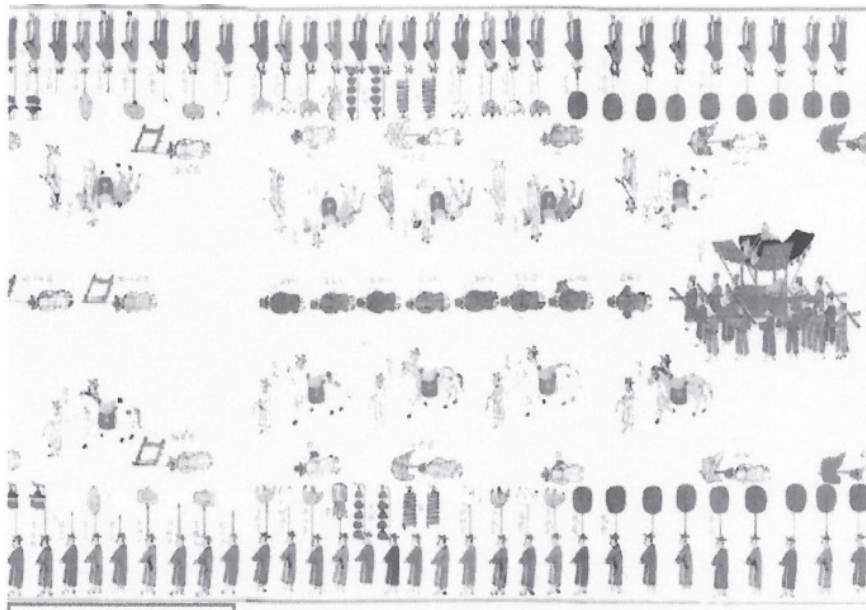


図 8 『純祖純元王后嘉礼都監儀軌』「班次図」 1802 年 部分 国立中央博物館蔵 ソウル

朝鮮王朝の儀軌は 1395 年に初めて制作されたが、現存するのは 1601 年からであり、1910 年以降は植民地統治下の李王職で作成した儀軌に班次図が収録されているのみで、1928 年まで制作は続けられた。⁽²⁸⁾

多くの班次図に見る王室行事に関わる行列は、絵画作品としても残っている。18 世紀後半の王室行事を描いた記録画の中で、風俗画的要素が最も優れていると評価されるのが「華城陵行図」（国立中央博物館蔵、1795 年、8 曲、各 151.5 × 66.4 センチ）である。「華城陵行図」については 7 人の画員が屏風絵の制作に携わったとされるが、その名を挙げると、金得臣（1754 - 1822）、李寅文（1745 - 1821）、

崔得賢、李命奎、張漢宗（1768 - 1815）、尹碩根、許寔（1762 - ?）など、当代に名を馳せる腕の優れた画員ばかりである。図は、正祖が1795年閏2月9日から16日まで8日間にわたり、華城にある生父莊獻世子（1735 - 1762）の園所、顕隆園へ行幸した際に行った主な行事を屏風絵としても制作させたものである。「華城陵行図」の第7扇と8扇には、正祖の華城陵行の壮大な行列が描かれている。

「還御行列」と題される第7扇（図9）は、華城陵行の7日目の閏2月15日、行事を終え、漢陽に還御するために華城行宮を出た正祖の行幸の行列が始興行宮に至った様子を描いている。儀軌には6,800人余りの人員と1,000頭以上の馬が動員されたと伝わる大規模の行列であるが、縦に長い屏風絵には、S字の力動的な構図の中に大行列が効果的に配置されている。⁽²⁹⁾「華城陵行図」の第8扇は、「漢江舟橋還御図」と題される（図10）。



図9 金得臣外『華城陵行図』「還御行列」 1795年 国立中央博物館蔵 ソウル

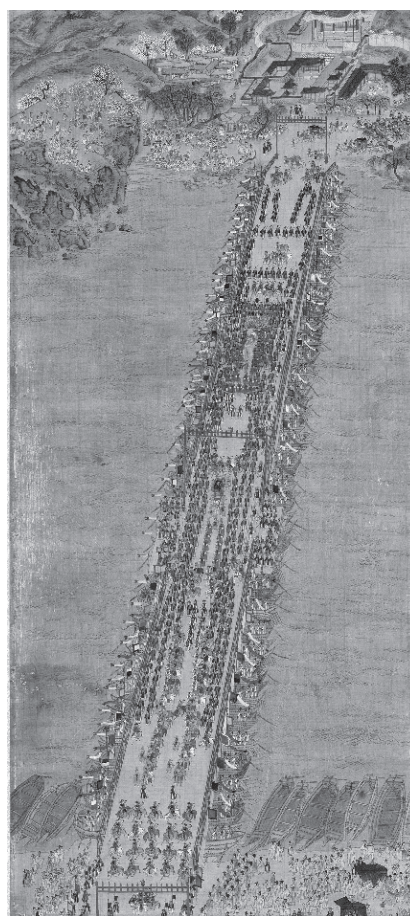


図10 金得臣外『華城陵行図』「漢江舟橋還御」 1795年 国立中央博物館蔵 ソウル

閏2月16日、始興行宮を出発し、鷺梁津（漢陽と始興をつなげる渡船場）に設置された船橋を渡り、王宮の慶徳宮に還宮する行幸の行列を、漢江の北側から捉えている行列図である。船橋は、正祖が生父の莊獻世子の陵（墓）を華城に遷葬した後、華城に頻繁に行幸するようになり、本格的に使用されることになった。図の中の船橋は、36隻の橋排船（船橋を作る際につなげる船）をつなげ、240双の欄干を立てている。橋には3基の紅箭門（宮殿、官衙、陵、廟などの前に立てた木の門）が設置され、また船橋の左右には12隻の護衛船が繋がっている。⁽³⁰⁾図の船橋の中央付近には紅箭門を通る正祖の生母惠慶宮洪氏の輿が描かれ、その後ろに正祖の行列が続く。画面構成は対角線に捉えられ、朝鮮時代に制作された絵画の中には例のないダイナミックな行列図となっている。

以上は王室の行事と関わりのある行列図を取り上げ、その概要をまとめた。王室の行事は国家の行事そのものであるが故に、行列図も班次図を中心に記録的な要素が強い。中には「華城陵行図」のように、史実を描きながらも、従来の班次図とは異なる画面上の構成や風景の描き方などが注目され、絵画として優れた行列図が現存する。

(2) 外交行事と関わる行列図

次は、外交行事にまつわる行列図を見ていきたい。作例として、日本の使臣を接待する東萊府の府使の行列を描いた2点の屏風絵及び甲子航海朝天図と呼ばれる、明へ渡った奏請使一行の行列図が現存する。

国立中央博物館が所蔵する「東萊府使接倭使図」(図11)は、日本の使臣を接待する東萊府使一行を描いている(以下、中央博物館本と称する)。この図は、東萊府使が倭使を接待するために宴会を開いた官衙行事を、画員鄭敷(1676 - 1759)に描かせたとされる10曲一隻の屏風絵であり、一種の官選記録画のような屏風絵である。⁽³¹⁾管見の限り、外国の使臣が図の中に登場するのは、この中央博物館本及び次に取り上げる国立晋州博物館蔵「東萊府使接倭使図」の2点のみである。朝鮮王朝において日本との外交に関する約條、例規、儀礼などに関しては『増正交隣志』に集成されているが、草梁にある倭館の建築や倭使の肅拜儀礼、そして宴会の儀などの外交行事については、文献の記述がなく、この屏風絵の資料的価値は非常に高いと評価される。⁽³²⁾



図11 伝鄭敷筆「東萊府使接倭使図」部分 国立中央博物館蔵 ソウル

全幅にわたり、儀礼の場面が異時同図的に描かれている。行列図のみが描かれているものではないが、中央博物館本の第1扇から第7扇まで、東萊府使が東萊府を出て、草梁倭館の設門まで倭使を迎えるための長い行列が、实景を背景に描かれている。第1扇の右上には東萊府の邑城が描かれ、府使は東萊府邑城の南門を出て草梁倭館に向かった様子がうかがえる。大旗幟は清道旗(軍旗、行列の先頭に立ち、道を払う役割をする)、金鼓旗(吹打手の坐作進退を指揮する軍旗)、纛(御駕や軍隊の大將の前に立てる軍旗)と形名旗(朝鮮王朝の王権を象徴する竜が描かれている旗)が続き、鼓吹隊と細樂の後ろに東萊府使の双轎の行列が描かれている。邑城の南門を出た東萊府使一行は、さらに広濟橋を渡り、釜山鎮を通る。釜山鎮の船倉には、朝鮮の外交使臣が日本に渡航する際に利用する船が見える。第7扇には草梁客舎での倭使の肅拜、そして第10扇には宴享廳での宴享儀礼が描かれている。

大勢の兵卒と共に鼓吹隊と細楽手、宴享のための妓女を伴った東萊府使の乗った双轎は第4扇に登場する。双轎は馬が運ぶ輿である。二品以上の官吏に乗轎が許されたが、それ以外にも、従二品の義州府尹や正三品の東萊府使には例外的に双轎の乗用が許された。⁽³³⁾ 義州府尹や東萊府使は外交関係で中国と日本の使臣に接することの多いことから、官僚の威厳を備えるために双轎の乗用が認められた。

中央博物館本の制作年代に関しては、『増正交隣志』に、1710年（肅宗36）、草梁倭館に新たに設門が重建されたことや中門の建立年代から、上限は1710年（肅宗36）、下限は草梁倭館の宿舎が重建された1758年（英祖34）とされる。⁽³⁴⁾

2点目の作例は、国立晋州博物館所蔵の「東萊府使接倭使図」10曲一隻屏風絵である（以下、晋州博物館本と称する）。⁽³⁵⁾

全体の画面構成と描かれた内容は、前述の中央博物館本「東萊府使接倭使図」と類似する。中央博物館本と異なる点は、晋州博物館本には倭館の西側の景観が描かれているところである。画面の右上から、日本使節を迎えるために東萊府使が邑城の南門を出て、草梁倭館に向かう長い行列が7扇にわたって描かれていることや、広濟橋を渡り、釜山鎮の軍事基地を通る東萊府使一行の路程、そして背景に描かれている釜山鎮の船倉も中央博物館本と近似する。

日本と朝鮮王朝との外交に関わる行列図の他に、朝鮮王朝が明に派遣した謝恩奏請使の行列を描いた絵画が現存する。⁽³⁶⁾ 仁祖反正が起きた翌年の1624年（仁祖2、甲子年）、仁祖即位の承認を明から受けるため、正使の李徳洞（1566 - 1645）と副使の呉翻（1592 - 1634）、そして書状官の洪翼漢（1586 - 1637）を三使とする奏請使が派遣されたが、これらの奏請使一行の路程を描いたものが、甲子航海朝天図と呼ばれる一連の画帖である。作例は、国立中央図書館蔵『燕行図幅』（紙本淡彩、冊子本、37.5 × 62.0センチ、17世紀）をはじめ、現在、5点の異本の存在が明らかになっている。国立中央博物館蔵の『航海朝天図』（紙本淡彩、41.0 × 68.0センチ、18世紀後半）、国立中央博物館蔵『朝天図』（紙本淡彩、40.0 × 68.0センチ、18世紀後半 - 19世紀前半）、陸軍博物館蔵『朝天図』（紙本淡彩、35.8 × 64.0センチ、19世紀以降）、個人蔵『旋槎浦図』（紙本淡彩、30.0 × 56.7センチ、19世紀）がそれである。⁽³⁷⁾ 1624年、奏請使は正使、副使の他に、訳官（正三品の通訳官）、通事（正三品以下の通訳官）、写字官（文書を精写する仕事を担った官吏）など正官約40人余りで、水夫などを合わせると400人ほどであった。⁽³⁸⁾ 海路を通る路程であったため、生死を共にした三使が、使行を無事終了したのち、その苦楽と友誼を記念すべく、甲子航海朝天使行図を制作し、家蔵したものと考えられる。⁽³⁹⁾

1624年の奏請使は、中国に向かうために、平安道の郭山の旋槎浦を出発した。6隻の船舶で、海路で中国山東の登州に着き、陸路で北京まで移動した。⁽⁴¹⁾ 『燕行図幅』、『航海朝天図』及び『朝天図』の第1面「旋槎図」（図12）には、旋槎浦で船に向かう使行の行列が描かれている。正使の李徳洞と副使の呉翻、そして書状官の洪翼漢の三使は日傘を差し、平轎子のような輿に乗り、その他の使行は馬に乗っている。平轎子は、従一品以上の最高官吏のみ使用することができたが、中国から来た使臣も乗用が可能であった。⁽⁴²⁾

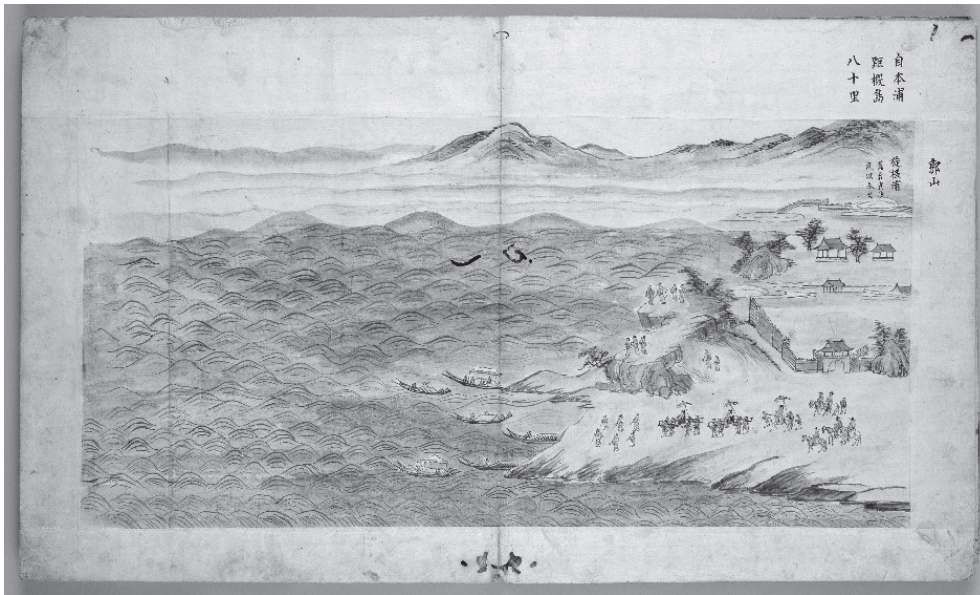


図12『航海朝天図』第1面「旋槎図」 国立中央博物館蔵 ソウル

図の背景には凌漢山と水軍僉節制使（各道水軍に置いた従三品の外職武官）の官衙が描かれている。三使は3隻の船にそれぞれ文書と明に捧げる方物（明に捧げる礼物）を分けて載せ、残りの3隻は水軍や従者と荷物を載せる船である。旋槎浦の丘の上では、各邑の守令たちが出て、遠出の使行に餞別を送る場面である。⁽⁴³⁾人物の描き方や行列の配置、そして背景の風景まで4点の構図は酷似しており、『燕行図幅』が使行と最も近い17世紀に制作され、その後、伝来の過程で幾種の異本が作られたという説が有力である。⁽⁴⁴⁾

『航海朝天図』第6面には中国の「登州府」（図13）が描かれている。海路で中国山東の登州に着いた使行は、登州で表文（奏文）と咨文（外交文書）を奉安し、方物を整理し、陸路使行のための旅支度を整える。⁽⁴⁵⁾図には、異国で行進を続ける朝鮮王朝の使臣の行列が描かれている。使行の一行は、表文と咨文を載せた馬を先頭に、輿に乗った三使と共に登州の城内を行進している。陸路での使行を開始する当時の使臣の行列がうかがえる貴重な図である。

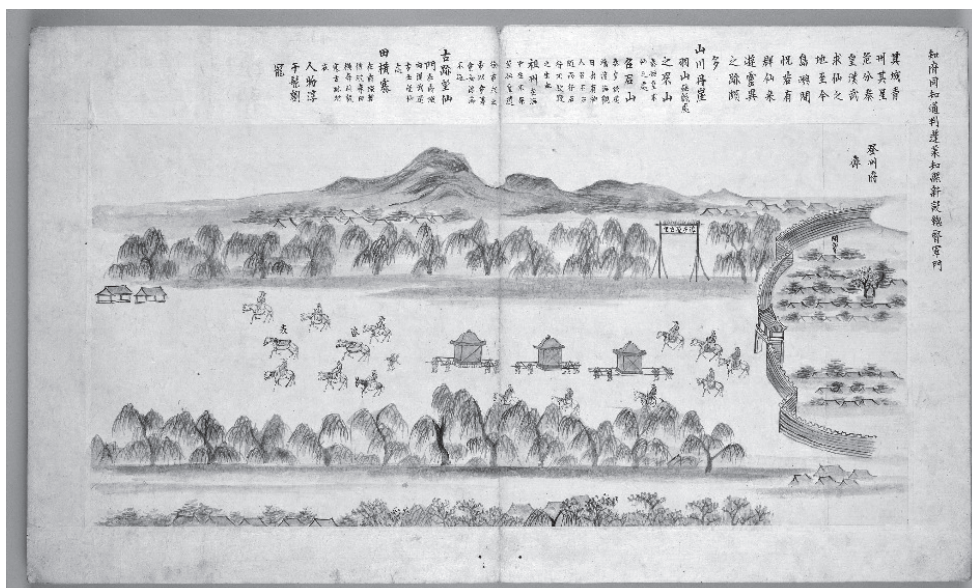


図13『航海朝天図』第6面「登州府」 国立中央博物館蔵 ソウル

(3) 官吏赴任行列図

朝鮮時代に制作された行列図の中に、官吏の赴任行列を描いた図は、意外と少なくない。これは18世紀に流行した風俗画制作の流行とも無関係ではないと思われるが、その中でも以前には見ることの少なかった官吏の赴任を絵画化する動きが活発になったようである。

官僚赴任に関わる絵画作品は不特定の人物を描いているものが大部分であるが、具体的な人物の行跡として描いている作例としては、国立中央博物館が所蔵する「安陵新迎図」を取り上げることができる(図14)。「安陵新迎図」は、縦25.3センチ、長さ633センチの巻物である。戊申年(正祖10、1786)に樂山軒という人物によって書かれた題跋には、乙巳年(正祖9、1785)の春に父親申思運(1721-1801)が安陵(平安道安州牧)の守令(州、郡、県の各村を統治した地方官)として赴任したが、その威儀の盛大さを見て丙午年(正祖10、1786)に図画署の画員金弘道にその行列を模写するよう頼み、完成させた⁽⁴⁶⁾とされる。しかしながら、図の表現、特に人物の描写を注目してみると、題跋が語るように、金弘道が描いた真作とは信じ難い。長軸の巻物の中には種々の大旗幟(朝鮮時代、軍で利用した儀仗と信号用の旗)、2挺の輿、そして大勢の陪行人と軍卒が描かれており、守令の赴任行列に相応しいと思われぬほど壮大で華麗な行列になっている。輿も双轎と坐車(輿に車輪が付き、1頭の馬がひく輿)の2挺が登場する。



図14 伝金弘道筆「安陵新迎図」1786年 部分 国立中央博物館蔵 ソウル

朝鮮時代に官吏赴任行列そのものを主題としたのは、前述の「安陵新迎図」以外に、個人蔵「留営首陽館延命之図」を取り上げることができる。図は紙本淡彩で、掛軸装(149.3×59.3センチ)である。「安陵新迎図」と共に実存した人物の赴任行列を絵画化したものである。図は、尹斗寿(1533-1601)が延安府使として在職した際に、10年前の1581年、黄海道觀察使に赴任した当時のことを振り返り、「留営首陽館延命之図」を制作したと知られて⁽⁴⁷⁾いる。図には、北に聳える首陽山を背景に海州城が描かれ、海州城内外で行われる延命儀式の場面が捉えられている。延命儀式は、黄海道觀察使が海州府の客舎(朝鮮時代に各地域に設置した官舎)に到着し、国王の肖像の代わりに奉安された殿牌の前に教書と諭書を持って進み、国王の詔諭(国王の命令を一般に知らせるために作成した文書)を授かったことを告げる儀式である⁽⁴⁸⁾。実存した人物の赴任行列であり、制作年代が最も早い作例である。

(4) 都市図の中の官吏赴任行列と「觀察使赴任図」

朝鮮時代に制作された官吏赴任図として、最もよく知られているのが、国立中央博物館蔵の「平安監司饗宴図」(紙本彩色、71.2×196.6センチ)である。「平安監司饗宴図」は、平安監司の赴任を祝う饗宴を、「月夜船遊図」、「浮碧楼宴会図」、「鍊光亭宴会図」の三幅から構成される。図には横に長

い画面に大同江とその周辺で行われる昼夜の宴会の様子が賑やかで華麗に表されている。これらの作例は、赴任を祝う宴会の様子を描いたものであり、赴任そのものを主題にしていないが、行列図として注目されるのが、「月夜船遊図」である（図15）。「月夜船遊図」は、平壤の入り口である大同門を背景に、大同江での夜の船遊が繰り広げられ、平安監司（平安道観察使）が乗る官船を中心に十数隻の船による行列を描いている。監司の乗った船には監司を象徴する節と鉞が船の先頭に立ち、教書と諭書が船の屋根の軒に掛かっている。

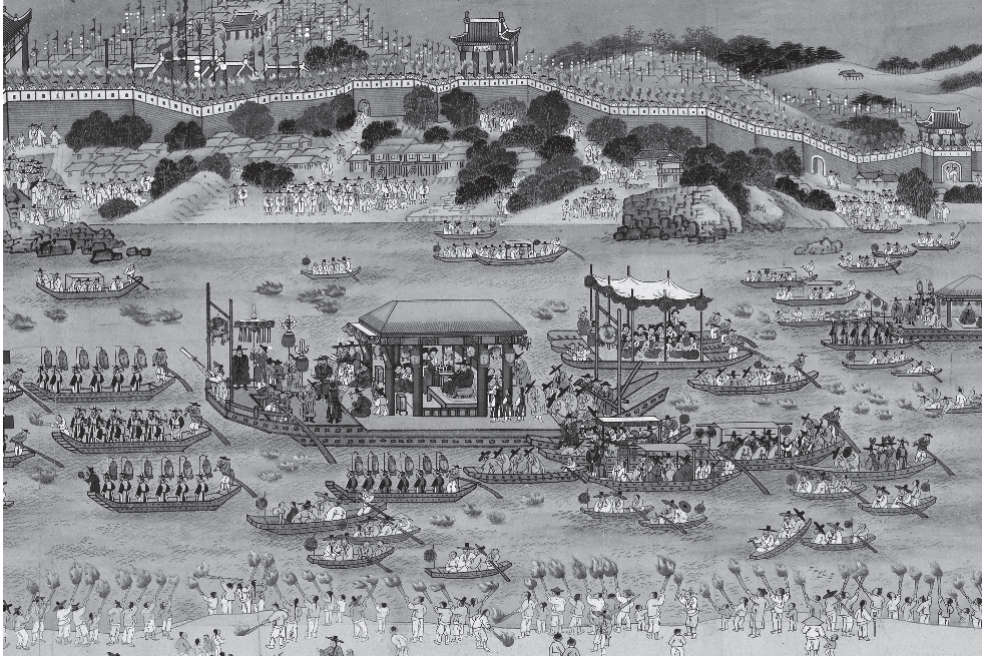


図15 伝金弘道筆 『平壤監司饗宴図』「月夜船遊図」部分 国立中央博物館蔵 ソウル

平安監司の赴任を描いた作例は、この他にも多数現存する。筆写未詳のソウル大学校博物館蔵「平壤図」（紙本彩色、10曲一双屏風、各131.0×39.0センチ）の中にも平安監司の赴任行列が描き込まれている（図16、17）。画面の下段には、平壤の永濟橋（平壤の大同江にある橋）を通る監司の輿の前後に、旗手と吹鼓手、細楽手、兵士、妓女など、長蛇の列がびっしりと描かれる。行列は大同江を渡り、平壤城に入城するため、船の方へ向かって行進している様子である。平壤城に入城するためには長林を通り、大同江を渡らなければいけないとされるが、図はその行列を描写している⁽⁴⁹⁾。行列は10扇のうち、第3扇から第10扇まで続いている。

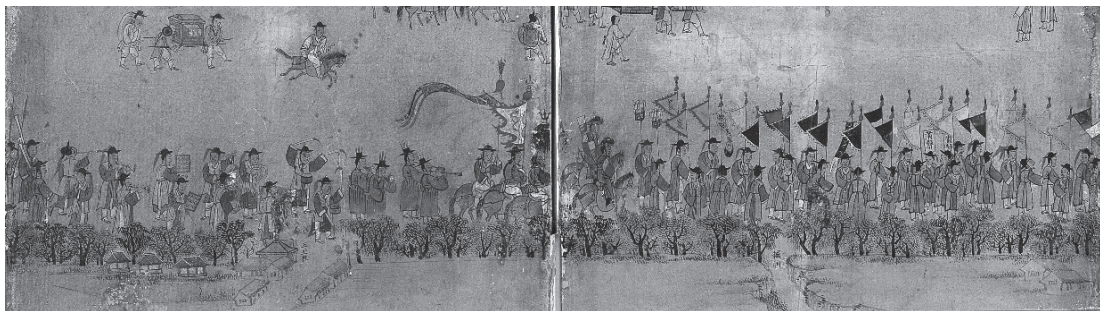


図16 「平壤図」部分 ソウル大学校博物館蔵

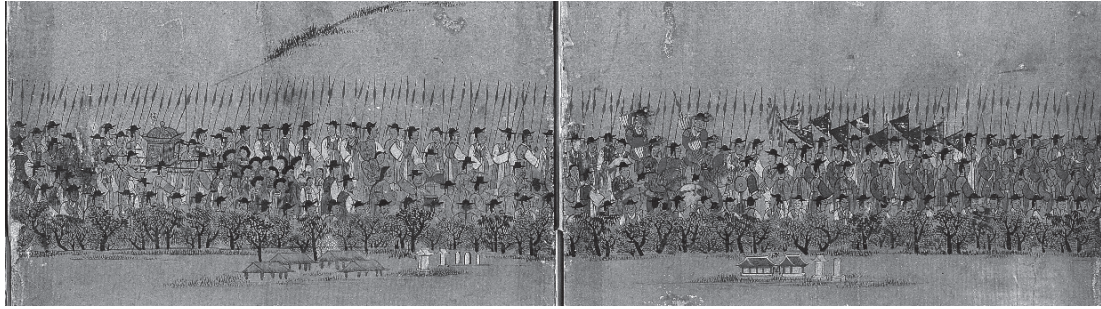


図 17 「平壤図」部分 ソウル大学校博物館蔵

このように、平壤図には、平壤のイメージとして定着している平安監司（平安道観察使）の行列を伴うものが少なくない。平安監司を絵画化したものとしては、他に、アメリカのピーボディ・エセックス博物館蔵「平安監司饗宴図」（絹本彩色、8曲一隻、各 128.1 × 58.1 センチ）がある。第 6 扇と 7 扇には大同江の渡江の場面が、第 8 扇には平安監司が鴨緑江、清川江一帯を巡視するために、平壤城を出発する行列が描かれている。⁽⁵⁰⁾ いわゆる平壤図は、名所としての平壤とその周辺の景観をクローズアップしながらも、平安監司の饗宴の場面や赴任行列を平壤の名高い行事としてまとまりよく取り入れたものが多い。平壤は、都市図の中で最も多く絵画化された町であった。図録などで公開されただけでも 30 - 40 点の作例がある。⁽⁵¹⁾ 中には多色刷りや木版図と肉筆彩色を併用した作例もあり、朝鮮時代には平壤図を求める一般の人々の需要がかなりあったと思われる。⁽⁵²⁾ 平壤図は、朝鮮時代末期まで広く流布し、平安監司の行列は、広く民衆に親しまれた官衙風俗の光景であっただろう。

II 「観察使赴任図」の図像の分析と『東アジア生活絵引—朝鮮風俗画編』の再考

以上、朝鮮時代に制作された行列図について、図像資料を提示しながら概観した。次は『平生図』「観察使赴任図」を取り上げる。「平生図」は以上に取り上げた行列図の中でも特異なものである。

「平生図」は、8 曲ないし 10 曲屏風に、士大夫の一代記を表す構成で仕立てられた風俗画であり、図の中には、最も典型的な姿の官吏が登場する。「平生図」は、朝鮮時代に最も理想的で富貴な人生を形象化したものであり、その需要は、士大夫の人生を羨望し、最高の官職に就くことを理想の人生とする中人階級の視線に支えられている。⁽⁵³⁾ 本論で取り上げる伝金弘道筆「平生図」の中にも具体的な官職名が示される。最初の官職は翰林兼修撰（翰林は芸文館の正七品の官職で、修撰は弘文館の正六品の官職）、次が観察使赴任（従二品外官職）、そして、判書（正二品の長官職）と政丞（正一品の官職）へと官職が上がっていく過程が描かれている。その中の「観察使赴任図」は、官吏赴任を描いており、見る人に典型的な観察使赴任行列と認識された姿で表わされている。『平生図』の「観察使赴任」は、地方官赴任の在り方を、当代の最も普遍的なイメージとして取り上げ、絵画化したものとして、資料としての意義がある。次章からは、『平生図』「観察使赴任図」を詳細に分析し、赴任図にまつわる様々な文化的諸像を具体的に探っていきたい。

(1) 先頭と後尾の人物と教書・論書

伝金弘道筆『平生図』の「観察使赴任図」(図18)を日本で初めて研究資料として取り上げたのは、神奈川大学21世紀COEプログラムが発行した『朝鮮時代生活絵引』であった。同書は、伝金弘道筆『平生図』「観察使赴任図」を資料の一つとして取り上げ、⁽⁵⁴⁾図の中の個々の人物や事物がどのようなものであるかを明らかにし、また、場面全体の読み取りを行った。ここでは、その成果を踏まえて、若干の誤謬を直しつつ、新たな知見を加えたい。まず、行列の先頭から順次確認していきたい。



図18 伝金弘道筆『平生図』「観察使赴任図」



図19 伝金弘道筆『平生図』「観察使赴任図」部分

先頭で馬に乗っている2人の人物は前陪裨将である(図19)。観察使が出行する際に、その行列を導く役割をする武将である。啓請軍官、又は幕裨とも呼ばれる人で、国王に奏請して任用された軍官であった。⁽⁵⁵⁾前陪・後陪裨将については、『朝鮮時代生活絵引』では特定しなかった。箆に入った矢が見える姿であるが、恐らく筒箆を背負っているのであろう。筒箆は箆(矢箆)と弓袋を指すもので、文武官が帖裏⁽⁵⁶⁾を着用する際に伴うものである。裨将は、監営では、営吏が作成する穀簿を監査し、観察使の代わりに道内の農作の出来栄を探ることもあった。即ち、郡県の留庫穀の分留実数を監視し、災害が起きた際には救恤の行き届きを探り、罹災民を慰問し、守令の適否と勤慢を探るなどの役割も担ったので、いわば、観察使の秘書のような立場の武官である。⁽⁵⁷⁾観察使が出行をするときには箆を背負い、伝令牌を付けて観察使の前後で扈衛した。双轎と呼ばれる乗り物のすぐ後ろの2人の人物も裨将である。先頭の前陪裨将に対して、観察使の乗り物の後ろで警護をする裨将なので後陪裨将と呼ばれる。後陪裨将も先頭の前陪裨将と同様に箆を右脇に斜めに掛けており、箆の先端部には矢が覗いている。矢は箆の矢箆に入れられ、左脇には赤色の弓袋が見える。筒箆は猪皮で作られ、掛けるための帯は鹿皮で作られた。矢箆足袋のような恰好の弓袋は黒皮で作られ、帯は鹿皮で作られた。⁽⁵⁸⁾背中に掛ける際には右から左に掛け、左脇で結び付けた。⁽⁵⁹⁾

裨將の服装は袖が広く、後ろの腰上に細長い髷が見えることから帖裏（表衣であり、戎服とも呼ばれる）を着用していると思われる。帖裏は、二重襟の上衣と髷を付けた裳を腰あたりでつなげた直領交衽の袍（表衣）である。世宗7年に、国王が行幸する際に侍衛軍士は帖裏を着用することを命令した記録が最初である。⁽⁶⁰⁾ 帖裏は、本来、士大夫の便服で表衣として着用したのが、公服としても着用され、後に戎服として制度化された。⁽⁶¹⁾ 朝鮮王朝初期の帖裏は袖幅が狭く、上衣と下裳の長さがほぼ同じで、結び紐（ゴルム）を右側の深いところで整えた。しかし、後期になると下裳の丈が長くなり、髷は初期の細かった形象から太くなる。⁽⁶²⁾ 上衣下裳の帖裏の形は、裳幅が広く、活動に適して馬に乗るに非常に便利であった。壬辰倭乱（1592 - 1598）と丙子胡乱（1636 - 1637）以降には帖裏は戎服に定着し、両乱後に帖裏から官服への復帰はすぐに実施されなかった。それは、帖裏の着用は国乱の克服を象徴し、乱が終わっても警戒心を保つ意味で帖裏を士大夫の平常服として着用していたという。⁽⁶³⁾

朝鮮時代の末期の純祖代（1800 - 1834）に至って、帖裏（戎服）は、道袍（表衣）の中衣として着用され、帖裏の上に掛けると朝会に出られ、道袍を脱ぐと帖裏のままで戎事ができるとし、帖裏は武官の便服になった。⁽⁶⁴⁾ 図の中の裨將の着る帖裏は薄青色である。広多絵と呼ばれる幅の広い帯で腰を回している。輿の中に座る観察使も恐らく帖裏を着用していると思われるが、その色濃い紺色で帯は朱色の広多絵であり、服・帯の色において差がある。

裨將の冠帽は黒笠である。帖裏を着用する際の冠帽は、『統大典』に次のように規定されている。

堂上三品以上 〈冠〉戎服紫笠貝纓〈服〉戎服藍色帖裏

堂上三品以下 〈冠〉戎服黒笠晶纓〈服〉戎服青玄色帖裏（郊外動駕時即紅色帖裏）

堂上官（正三品以上の品階の官吏）は紫笠をかぶり、堂下官（正三品以下の品階の官吏）は黒笠をかぶったが、地方監營に属する武官である裨將の冠帽も黒笠である。黒笠には挿飾が確認できるが、虎鬚と呼ばれる笠飾である。虎鬚の付いた冠帽は戎服の帖裏に付属して使用された。虎鬚を挿飾する風習は、顯宗が行幸の際に麦が豊作であることを喜び、臣下の冠帽に麦を挿して飾るようにしたこと由来する。英祖の時代には虎鬚以外に細竹をも使用されたが、麦鬚は虎鬚と共に朝鮮王朝の末期まで使用された。⁽⁶⁵⁾

前陪裨將の後ろにいる馬に乗った2人の人物はそれぞれ朱色の細長い筒を背負っている。筒は、観察使が国王から授かった教書と諭書を入れた文書筒である（図20）。これらの文書筒は、『朝鮮時代生活絵引』の編纂では明らかにできなかった事物である。観察使は各道における最高の地方行政官であると同時に、軍事指揮官として赴任地を統治した官吏である。国王に直結し、国王以外の誰からも直接命令を受けなかった。国王は観察使に任命された官吏に任命文書である告身を下し、また、命令文書である教書と諭書を授けた。観察使の教書は、国王が地方の行政と軍事を担当する官吏に任命したことを知らせる使命の内容及び赴任地の統治権を示す訓諭の内容が収録された使命訓諭教書である。⁽⁶⁶⁾ 諭書は国王が観察使、留守、統制使、統禦使、節度使、防禦使などに密符の右側と共に下す密符諭書であり、非常時に兵力の動員に関わる内容が示されている。⁽⁶⁷⁾ 観察使の教書は、1392年（太祖1）9月に太祖が各道に按廉使を任命した時に教書を授け、初めて施行された。按廉使が観察使に改称された1430年（世宗12）12月に世宗が太祖の制度を継承し、各道に観察使を任命する時に教書を下した。⁽⁶⁸⁾ 観

察使の諭書は1443年（世宗25）8月に国王の命令を伝達する内伝消息の制度を諭書に変更した時に初めて施行された。⁽⁶⁹⁾



図20 伝金弘道筆『平生図』「観察使赴任図」部分

観察使は教書と諭書を通して国王の命令を委任し、赴任と巡歴の過程で教書と諭書を運用し、各道の行政と軍事を統率した。観察使は、赴任の過程で教書と諭書を赴任行列の先頭に立たせた。図の中にも、前陪裨将に続き、朱色の教書筒と諭書筒を背負った人物が描かれている。教書筒と諭書筒は、行列の主人公が国王の命令を受けて赴任する観察使であることを示し、赴任官吏の威厳を象徴する機能を持っていた。観察使が赴任過程で経由する州・府・郡・県の守令と駅の察訪（駅を管掌する従六品の外官職）は、観察使が各客舎に到着すると、教書と諭書に肅拝した。⁽⁷⁰⁾ また、観察使が赴任地に到着するときにも、赴任地の守令と察訪は五里程（赴任地から五里離れたところの客舎）で赴任行列を出迎え、教書と諭書に向けて肅拝した。⁽⁷¹⁾

観察使の在任中には、毎月1日と15日に漢陽にいる国王に向かい望闕礼を行ったが、その際、観察使は教書と諭書を先頭に扈衛し、客舎で望闕礼を行った。⁽⁷²⁾ また、観察使は在任期間中に州・府・郡・県を回り、民情を探り、地方の守令を査察する巡歴を行ったが、観察使の巡歴が到着すると、該当する守令は必ず五里程で待命し、客舎の庭で教書に肅拝する礼を行った。⁽⁷³⁾ 即ち、教書と諭書は国王の統治を代行するという、権力と威厳を象徴するものであった。

教書と諭書を入れた文書筒を持つ人物は両班士大夫が着用する道袍（表衣）を着て黒の細条帯をし、黒笠をかぶっている。道袍は袖が広く、四幅でできており、後ろに展衫が付いているので裾が開いて下衣が見えることはない。道袍は吉服には青色、常服には白色にし、細条帯は、堂上官は薄い朱色か紫色、堂下官は青色か緑色を用いることが多かったが、その他様々な色があり、自由を選択して用いたりもした。⁽⁷⁵⁾ 冠帽の黒笠は笠紐のみで貝纓を飾ったものではない。⁽⁷⁶⁾ 教書と諭書を入れた文書筒を持つ人物は、服飾からみると両班士大夫で、身分は監営の中では高い人々であると思われるが、品階が高い官吏とはいえないだろう。

(2) 観察使の儀仗と吹打楽隊（軍楽隊）

教書と諭書を持った人物に続くのは旗幟を持つ軍卒と吹打楽隊である。⁽⁷⁷⁾馬に乗った2人の軍卒が持つものは、節と鉞と呼ばれる観察使の儀仗である（図21）。全羅道の観察使を歴任した柳希春（1513 - 1577）の『眉巖日記』には、観察使巡歴の行列に、教書と諭書の次に節と鉞が登場することを明記している。⁽⁷⁸⁾節と鉞は国王が観察使に下賜した兵権を象徴するものである。⁽⁷⁹⁾



図21 伝金弘道筆『平生図』「観察使赴任図」部分

節は枝戟（三つ股の槍）を付けた旗竿の先端に楕円形の玉を付け、その下の2か所に朱色の象毛（総）を飾っている。鉞は、旗竿のてっぺんに枝戟があり、そのすぐ下に穂の形をした朱色の象毛が垂れている。節は水晶仗と呼ばれた国王の儀仗に類似するが、国王の行幸行列には金鉞斧と共に前列中央に配置した。⁽⁸⁰⁾国家儀礼の際にも殿庭月台（宮殿の広場に作った台）の右側に金鉞斧を、左側に水晶仗を並べて立てるが、図の中の節と鉞も左に節が右に鉞が配置されている。節と鉞は、観察使の重要な儀仗物として観察使赴任行列には必ず登場する。

節と鉞の後ろにある2人の軍卒も馬に乗っている。向かって画面右の軍卒が手にしているのは司命旗である（図22）。司命旗は軍隊の各陣営で軍卒を指揮するときに使われた旗で、観察使が軍事統率者であることを象徴する。⁽⁸¹⁾司命旗には主に陣営の名前が書かれるが、図の中の司命旗には字が見えない。司命旗の下の縁には五色の緞の帯が飾られている。

司命旗の左にあるのは、金鼓旗である（図22）。黄色い雲紋の緞の下地に「金鼓」という事を黒色で書くのが一般的で、旗の縁には朱色の火炎形の装飾が飾られている。金鼓旗は吹打手の坐・作・進・退を指揮するとき使用される。⁽⁸²⁾申思運（1721-1801）が安陵（平安道安州牧）の守令として赴任した際の新迎行列を描いた「安陵新迎図」には、金鼓と書かれた黄色い金鼓旗は登場するが、軍事統帥権のない守令の行列には司命旗は描かれていない。



図 22 伝金弘道筆『平生図』「観察使赴任図」部分

朝鮮時代に軍隊の指揮と通信に使用される旗幟類と金鼓類を「形名」と言った。⁽⁸³⁾形名は、旗幟類を意味する「形」と金鼓類を意味する「名」の合成語であり、旗と共に楽器による信号は軍隊に対する指揮の信号であった。軍門の指揮・通信は夜と昼によって異なったが、旗幟類である「形」は昼に旗幟の動きや信号で命令を伝達し、金鼓類である「名」は夜に音で信号を伝達したという。

司命旗と金鼓旗の次に続くのが軍営楽隊の吹打楽隊（吹鼓手と細楽手）である。本来、吹鼓手の吹打楽器は指揮・通信機能の道具として使用されたが、これが楽隊の形態になったのは壬辰倭乱以降の朝鮮王朝の後期であるとされる。壬辰倭乱をきっかけに吹鼓手、細楽手、内吹のような新たな演奏集団が登場したが、その中でも吹鼓手は、軍営楽隊の本来の機能である指揮及び通信の形名であり、軍営楽隊としての本質的な性格を有していた。⁽⁸⁴⁾この吹鼓手を含み、細楽手、吹打内吹、細楽内吹が軍営楽隊である。特に吹鼓手と細楽手は楽器編成こそ異なるが、行列で共に演奏し、それぞれ行楽（行進の際に演奏する音楽）と宴享（饗宴）楽を演奏した。細楽手は、三絃六角編成の楽隊であるが、軍営に属し、吹打手と対をなし、音楽活動をした。細楽手の音楽活動は、吹打手とほぼ同様であった。吹鼓手と細楽手は、中央軍営と地方軍営に所属し、指揮通信・侍衛・演奏の機能の他に、行進の音楽演奏の機能を担っていた。中央の五軍営と地方軍営に属する吹鼓手の担った行進の音楽演奏の機能は、軍営の行軍、国王の行幸、観察使、留守などの赴任行列、そして使臣の行列の四つである。⁽⁸⁵⁾

図は観察使の赴任行列に伴う吹打楽隊で（図 23）、楽器編成は、先頭から喇叭が一つ、喇叭を演奏する軍楽兵の後ろに縦笛が一つ、その後ろが法螺（螺角）、その隣の朱色の号衣（袖のない表衣）を着ている軍楽兵が持っている楽器は鏡鉞であり、その後ろの楽器はまた喇叭で、また、さらにその後ろの楽器が鞞鼓（長鼓）である。9人の軍楽兵の内、3人の演奏する楽器は不明である。⁽⁸⁶⁾



図 23 伝金弘道筆『平生図』「觀察使赴任図」部分

本来、吹鼓手の楽隊の楽器編成に含まれる楽器は、大角、螺角、喇叭、唃囉、胡笛、撻鈸、啗唃囉、點子、金、鉦、鑼、鼓のような、12種類の管楽器と打楽器で構成されるが、⁽⁸⁷⁾ 図の楽隊の楽器は唃囉の種類である鏡鈸、法螺（螺角）、喇叭の他に、吹鼓手の楽器に含まれない縦笛と鞞鼓（長鼓）が見えるのが興味深い。縦笛と鞞鼓（長鼓）は大琴（横笛）、奚琴、鼓と共に細楽手の楽器である。前述したように、細楽手は朝鮮後期に吹打手と共に軍楽の二つの組織として定着したもので、中央軍制では五宮門にそれぞれ吹打手と細楽手が所属し、⁽⁸⁸⁾ 内吹と呼ばれる楽人も吹鼓手と細楽手で構成された。このような組織形態は地方官衙及び軍事機関でも同様であった。しかし、「觀察使赴任図」に描かれる吹打楽隊は、吹打手が前、細楽手が後ろ、といった前後編成ではなく、吹打手の中に細楽手の楽器である縦笛と鞞鼓（長鼓）が混在している。3人の軍楽兵が演奏する楽器は不明で、また、屏風の一扇という狭い描写空間の中で表現の制約もあり、楽器編成が明確ではなく、図の中の吹打楽隊は吹打手と細楽手が混成されているように見受けられる。

吹鼓手は袖の細い表衣である狭袖袍という上衣を着用し、さらにその上に号衣という戦服を着用し、纏帯という藍色の帯をしている。戦服は朱色と黄色の2種類が描かれ、吹鼓手はみな戦笠と呼ばれるフェルト帽をかぶっている。朝鮮王朝の財政と軍制を記録した『万機要覧』に、吹鼓手の服装は戦笠をかぶり、黒三升甲挾袖（中衣）に、木綿の黄号衣（表衣）を掛け、黒水靴子を履き、劔を下げて各種の楽器を演奏すると記されている。⁽⁸⁹⁾ 図の中の吹鼓手は9人の内、7人が黄号衣を着用しているのに対して、2人が紅号衣を着用している。楽器は鏡鈸と縦笛といった打楽器と管楽器を演奏することから、号衣の色は楽器の種類とは無関係のようであり、地方監營に所属している吹鼓手は中央の訓練都監の服装とは差があったようである。草鞋を履き、歩行と行動を手軽にするためなのか、一般的には脛に巻く行纏を膝の下まで巻いている。

赴任地の地方監營に所属する吹打手と細楽手は、漢陽まで新任の觀察使を迎えに行ったのであろう。

吹打楽隊を伴う観察使の赴任行列は、赴任地まで音楽を演奏しながら行進していく。吹打楽隊の音楽は、打楽器と管楽器を中心とした豪放な音楽を演奏する吹打手と、繊細な音を奏でる細楽手の演奏で、赴任地に至る所々で、祭りのような賑やかさを醸し出し、観察使の行列に華やかさを増幅させる役割をしたのであろう。

(3) 双轎とその周辺

吹打楽隊の後ろに続くのが観察使の乗った輿である。観察使の乗った輿は2頭の馬に担われ運ばれる双轎である(図24)。吹鼓手の後ろ、双轎の前は棍杖と朱杖を持った軍牢が続く。軍牢は軍営と官衙に所属し、罪人を罰する役割を担った軍卒である。4人の軍牢がそれぞれ棍杖と朱杖と呼ばれる棍棒を持ち、行進に加わっている。軍牢の服飾は、袖の細い号衣の色が、軍牢の所属によって統一されるのが一般的であった。号衣の色は方位色によるもので、東は青、西は白、南は紅、中央は黄色であった。⁽⁹⁰⁾ 図の中に、節と鉞、司命旗と金鼓旗を持つ軍卒と、軍牢の号衣は同一の薄藍色である。帽子は吹打手のそれと同様に、朱色の象毛の付いた氈笠と呼ばれるフェルト帽である。



図24 伝金弘道筆『平生図』「観察使赴任図」部分

軍牢の後ろは軍旗を持った軍卒が続く。双轎の右と左に軍卒がそれぞれ2人ずつ描かれている。軍旗は令旗である。藍色の緞で作り、「令」という字を朱色で書くか、朱色の布で「令」の字を旗に縫い当てることもある。図の中の令旗も藍色である。申思運(1721-1801)の守令赴任を描いた「安陵新迎図」の中にも令旗が描かれ、旗の上に令旗と、題跋が書き込まれ、旗の色は藍色で「令」の字が明確に確認できる。「観察使赴任図」の中の令旗には「令」の字は確認できないものの、令旗を描いているものと考えられる。

観察使が乗轎している輿は双轎である。双轎は、双馬轎、駕轎とも呼ばれ、17世紀頃から乗り始めたとされる。⁽⁹¹⁾ 双轎は官吏が乗ることのできる輿の中で最も豪華なものであった。

輿の前後に2頭の馬を配置し、鞍の左右に轆（ながえ）を架け、輿はその上に乗っている形で、駕籠かきが籠の横に通されている轆の均衡を保たせながら前に進んでいく輿である。双轎は、馬の力に依存する輿なので、特に長距離の旅に適している。

轆を持つ輿かきは少なくとも4人は必要であったが、実際はもっと多くの馬ひきや輿かきが必要であったとい⁽⁹²⁾う。図の中の輿の屋根は穹窿型で四面が半球状に反れ、朱色の円柱と帯状の装飾が施されている。双轎は威厳と華麗さを持ち合わせている輿で、乗轎できる人もごく限られていた。双轎は国王と二品以上の官吏及び観察使、承旨（正三品官職）の要職を経験した者にのみ乗輿が許され⁽⁹³⁾た。

しかし、実際には守令も赴任時に双轎を利用する例があった。木川県と全義県の守令を務め、その赴任過程を日記の『願齋乱藁』に残している黄胤錫（1729 - 1791）は、赴任に際し、双轎を求めて奔走したことが知られている。特に境内に入るときの行列の威儀は、境内の民に対する新任守令として体面に関わる⁽⁹⁴⁾ところで、黄胤錫は双轎に乗って赴任することを強く求めていたようだ。守令は独轎に乗るのが通例であったが、黄胤錫は規例を背いても敢えて双轎に乗り、赴任しようとした。「安陵新迎図」にも、守令の乗った双轎が描かれており、地方官の赴任に、規例に反する守令の双轎利用は少なくなかったようである。

双轎の運用は、坂道を上るときには馬に担がせ、下り坂や平坦でない道では輿かきに担がせるなど道路状況に応じて弾力的⁽⁹⁵⁾であった。図の中の双轎も山の坂道を進んでいき、双轎の特徴が際立つ場面が設定されている。輿の横にある輿かきは轆を担ぎ、輿の後ろにいる輿かきは馬にまたがって轆を持って均衡を取っている様子である。双轎の轆は黒色で塗られ、轆には装飾が施されていない。輿には窓が設けられ、窓から赴任する観察使が覗かれる。観察使は黒笠をかぶり、藍色の帖裏（戎服）を着用し、朱色の広多絵という帯を締めている姿である。恐らく広多絵には割符入れを下げているのであろう。

輿かきは薄藍色の小氈衣（士大夫の中衣、庶民の表衣）に黒のフェルト帽の姿である。観察使を侍衛し、行列の後尾に馬に乗って進む2人の人物は後陪裨将である。前陪裨将の服装と同様に、虎鬚を挿した黒笠に薄い藍色の帖裏を着用している。後陪裨将が着用している下衣は、馬に乗る際に両足を覆う袴褶（サマチ）である。図には見えないものの、黒笠には虎鬚を挿すために、烏銅笠飾と呼ばれる細い金属製の筒が付着されていることであろう⁽⁹⁶⁾。後陪裨将が手に持っているものは藤策もしくは藤鞭と呼ばれる指揮棒である。藤の木で作られ、先端に鹿の革か色緞の帯をつけた⁽⁹⁷⁾。左脇からは朱色の弓袋が覗かれる。双轎のすぐ左に見える小氈衣姿の人物は、監営の六房（吏房、戸房、礼房、兵房、刑房、工房）の中の属吏で、お下げ髪姿の少年は通引と呼ばれる使い走りであろう。

Ⅲ 「観察使赴任図」の赴任儀礼

以上、図像の分析から観察使行列の構成について読解を試みた。それでは、図の中の観察使赴任行列は、赴任過程のどの時点を表そうとしているのだろうか。観察使はどのような過程を経て、漢陽を旅立ち、赴任地に到着するのだろうか。以下では、観察使の赴任過程を文献資料及び図像資料を参考にしながら、「観察使赴任図」の読解を試みる。

観察使は、毎年一月に議政府の議政と六曹の堂上官及び司憲府と司諫院の官吏が候補3名を推薦することから選出が始まる。⁽⁹⁸⁾ 推薦された候補者の名簿を承政院で国王に上奏した後、最終的に国王の決裁を受け、任命される。観察使は国王に辞朝（暇乞いの礼）するために国王に拝謁する。国王は赴任地を立派に統治するよう頼む言葉を言い、承旨が教書と諭書を伝達した。国王は教書と諭書の他に、密符、節と鉞を授け、また弓矢、薬物などを下賜することもあった。このような国王への謝恩肅拜と下直（暇乞い）肅拜といった肅拜過程及び教書と諭書を受け取る過程が終わると、いよいよ赴任過程が本格化する。

観察使の赴任過程について具体的な行程を明記した文献は見当たらないが、儒学者の丁若鏞（1762 - 1836）が著した『牧民心書』の中に、官吏赴任の過程について、除拜、治装、辞朝、啓行、上官、莅事と区分している。⁽⁹⁹⁾ 除拜は官職に任命されることをいい、治装は赴任する際の行装を、辞朝は国王に赴任の挨拶を捧げることである。啓行は赴任地へ旅立つことであり、上官は任地に赴任すること、そして莅事は赴任地で政務を執ることをいう。その中で、新迎⁽¹⁰⁰⁾に当たる条目は、赴任の行装をくくる過程である治装及び除拜の新迎の準備条項とみることができる。『牧民心書』赴任6条の除拜では新迎の礼として、一つ目は支装（任地の土産）を捧げること、二つ目は衙舎を修理すること、三つ目は旗幟を持って出迎えることを挙げているが、新迎は三つ目の旗幟を持って出迎えること以降のことになる。それでは、「観察使赴任図」が描いたのは、いつの時点の赴任行列であるだろうか。まず、絵画資料から検討しよう。

第1章で言及したように、朝鮮時代に制作された絵画資料の中に、官吏赴任を描いた作例は少ない。『平生図』の「松都留守赴任図」、「平安監司赴任図」の他に、高麗大学が所蔵する「新官到任宴会図」、国立中央博物館蔵の「平安監司饗宴図」などがあるが、実存した人物の赴任行列を具体的に描いた作例としては、前出の国立中央博物館蔵「安陵新迎図」を取り上げることができる。「安陵新迎図」は、巻物の形式で、長い画面に多くの軍卒や乗り物、楽隊、妓女、陪行人などが絶え間なく続く（図25）。



図25 伝金弘道筆「安陵新迎図」 1786年 部分 国立中央博物館蔵 ソウル

図の中には、各人物や事物、様々な旗幟に名称を表す題跋が書き込まれている。守令の任期は5年もあり、赴任に至っては家族や眷属を伴うため、行列はさらに長いものになっている（図14）。「観察使赴任図」に描かれた人物に合わせて「安陵新迎図」の人物を比較したのが〈表〉である。

〈表〉『平生図』「観察使赴任図」と「安陵新迎図」の人物表現

『平生図』「観察使赴任図」	「安陵新迎図」
前陪裨将 2人及び輿かき 2人	

教書と諭書を持つ人物 2 人	
旗幟を持つ兵卒 7 人	旗幟を持つ兵卒 47 人
吹打、細楽手 9 人	吹打 10 人、細楽手 6 人
棍杖と朱杖を持つ軍牢 4 人	棍杖と朱杖を持つ軍牢 4 人
令旗を持つ兵卒 4 人	令旗を持つ兵卒 2 人
双轎の輿かき 4 人	双轎の輿かき 4 人
双轎の馬ひき 1 人	双轎の馬ひき 2 人
吏属 4 人	馬ひき 5 人
通引 1 人	通引 12 人
後陪裨将 2 人及び輿かき 2 人	
計 44 人	計 92 人

赴任行列における規模の違いは、「安陵新迎図」の場合、守令一行が赴任地の五里程に到着し、さらに多くの軍卒や衙前、楽工、通引などが新迎に加わったことによる。赴任行列は、境内に入るときに、守令の権威を表すために行列を華麗なものにする必要があった。また、旗幟を持つ兵卒と吹打手及び細楽手の人数も圧倒的に多い。陣将及び軍牢は、令旗及びその他の旗と共に五里程から合流したとされるが、⁽¹⁰¹⁾「観察使赴任図」の中の旗は極めて簡素なもので、司令旗と金鼓旗がすべてである。しかし、「観察使赴任図」を「安陵新迎図」の行列と比較すると、最も目立つ差があるのが、「安陵新迎図」には教書と諭書を持つ人物と、節と鉞を持った軍卒が描かれていないことである。

朝鮮時代末期に書かれたハングル小説『李春風伝』は、漢陽を立ち、平壤に向かう観察使の行列を次のように描写している（日本語訳は筆者による）。

（前略）この日清明三吐の末に発行し、京城を立つ時に、器具も燦爛とし、威厳も厳粛である。早く歩く白馬に双轎、独轎、別輦に、左右には青驄馬が騒ぎながら浩気よく下っていく時に、前陪、隨陪、冊房、裨将、身なりを整え、装いを凝らし、順序よく並び、装飾した白馬の背中に虎皮の鞍当てに高く乗り、瀟湘班竹と灑金扇で日差しを遮り、平壤に下っていく際、⁽¹⁰²⁾どうして宜しくないだろうか。（後略）

小説ではあるが、観察使が赴任する行列を描写する中には、前陪、隨陪、冊房、裨将などの監営の吏属たちが漢陽からの赴任行列を共にしていることが伝わる。

また、漢陽を立つ観察使の行列を次のように表している（日本語訳は筆者による）。

（前略）吏房、工房、刑房、隨陪、通引、官奴、軍牢、羅将が旗の中に並び立ち、下がれという勸馬声に、好事よく下っていく。南大門へと突っ走り、連珠門をすばやく通り、母岳⁽¹⁰³⁾ジェを越えながら、小さな嶺や大きい嶺を通りながら見るや、見るものがすべて素晴らしい。（後略）

また、観察使の赴任行列にお供する吏房、工房、刑房、隨陪、通引、官奴、軍牢、羅将などが旗の中に立ち並んでいると描写している。旗を持つ兵卒は漢陽を経た時から赴任行列に加わっていたことがうかがえる。しかし、「安陵新迎図」のような五方色で表す伝統的な五軍編成（先鋒－左軍－中軍－右軍－後軍）が続く編成は赴任地の境界に入ってからであると考えられる。

観察使が任地の境界に着き、盛大な新迎を受けることについては、朝鮮時代後期の文人申光洙（1712 - 1775）が著した『関西楽府』にその様子が記されている。『関西楽府』は申光洙が英祖 50 年（1774）に、平安道観察使に赴任する故友蔡濟恭（1720 - 1799）に、遊興の町として名高い平壤で享樂に陥ることなく政事に専念することを戒め、著した漢詩である。その中に、平安監司（平安道観察使）が五里程の中和県（平安道南部の県）境界で受ける新迎を次のように詠んでいる（『関西楽府』の「其二」の日本語訳は筆者による）。

其二

尚書玉節降西藩（尚書玉節が西藩に降りる）
 一品監司地面尊（一品監司の地面も高い）
 驚動楽浪諸父老（平壤の諸父老たちは驚いて立ち上がり）
 旌旗日望大同門（旗はひたすら大同門を見ている）

其三

中和界首福星来（中和県境界まで福星が来て迎える）
 四十三官礼状堆（四十三官の礼状が堆く積み上げられている）
 明日巳時軍令板（明日の巳時の軍令板に）
 押成忠字举行催（忠字を押して举行を催がす）

其四

前排已到唄江浜（前排は已に唄江の浜に到り）
 未起生陽館裏身（生陽館での身はまだ起きていない）
 天潤草青西北野（天は潤い草は青い西北の野に）
 白陵司令沸雲新（白陵司令旗が雲を拂い、清々しい）

其五

栽松院裏罷交龜（栽松院では符信の交換が終わる）
 此地年年多別離（この地には年々離別も多い）
 芳草夕陽千里路（芳草夕陽の千里の路に）
 断腸人是馬嘶時（断腸の人よ、馬の嘶く時である）

其六

長林五月緑陰平（長林五月に緑陰が平らかである）
 十里双轎勸馬声（十里の双轎に勸馬の声）
 永濟橋頭三百妓（永濟橋の橋頭には三百人の妓女が）
 黄衫分作兩行迎（黄衫姿で両側に列を作り迎える）

『関西楽府』の「其二」には、観察使の赴任に際して多くの旗と幡が平壤城の入り口である大同門に向かっていと詠んでおり、観察使の赴任行列に各種の旗幟が赴任行列に加わっていることを暗示している。また、監営の福星（監営に勤務する下級官吏の総称）が中和県の境界まで観察使を出迎え、各邑の守令は礼を捧げる。赴任の途中、平安監司は中和県の駅館である生陽館で一晩を過ごし、栽松院（平安道の境界にある駅館）で旧官と任務を交代する。観察使の行列が永濟橋（平壤の大同江にある橋）に至ると、平壤の妓女三百人が迎えるという華麗な新迎の場面が演出されていたことを、『関西楽府』は表している。

五方で表す五軍編成の旗を長く並べ、吹打や細楽手を伴った監司の行列が五里程を通っていく姿を描いた絵画資料がある。前出のソウル大学校博物館像「平壤図」には平安監司の行列と思われる長蛇の行列が描かれているが、一行は永濟橋を通り、大同門に入っていく場面を描いている（図16、17）。

境界地での新迎についてハングル小説『李春風伝』は次のように描写している（日本語訳は筆者による）。

（前略）中和邑内に宿舎を決め、ヨンゲ谷に至ると監営の官属たちと六房官属たちが長らく待ちかね、新官、旧官交代後任差に入る。おのおの隊伍を作り、噴官たちが先に出、前陪裨將、噴官、執事、数々の将官が行列を作り整然と立ち、千把摠が軍門に並び、擁護して入る時、大将清道旗各一組、筆策一組、道羅將が並び、東西南北に黄白青紅旗をきらびやかに広げ立たせ、刑房が謁見する際、三絃六角の楽器の音は山川がひっくり返るようで、⁽¹⁰⁴⁾ 権馬声、辟除の声、六角の音声が⁽¹⁰⁴⁾ 一帯に立ち込め、吹打声が鳴り響く。（後略）

『李春風伝』に描写されている平壤観察使の赴任行列は、平安道の南の境界にある中和で大々的な新迎行列と合流するのである。東西南北を示す黄白青紅旗が立ち並び、数々の将官が整列し、先払いの声と共に六角と吹打の音が鳴り響いていると描かれている。三絃六角は細楽手のことであり、赴任地の境界に至って細楽手は合流したことになる。『平生図』の「観察使赴任図」は、「安陵新迎図」のような、境界の五里程から赴任地の監営に向かう行列ではなく、また、『関西楽府』が伝える新迎の豪華な場面を盛り上げているものでもない。図は、漢陽で新迎を受けた観察使が、丁若鏞の言う「啓行行列」を組み、都から任地に向かう行列を描いていると読み解くことができる。図の視点は、赴任地の五里程に到着した後、赴任地の人々に強い印象を与える華麗な赴任行列に着目したものではなく、観察使として出世を遂げた図の主人公が、漢陽から赴任地へ向かう栄光なる姿を漢陽の人々のまなざしに答えるものとして描かれたといえよう。

「観察使赴任図」の行列には、「安陵新迎図」に見るような、家族や眷属を伴う長蛇の列ではない。観察使の任期は両界観察使の場合2年であり、家族を伴う赴任はできなかった。それは膨大な権限を持った観察使が一か所に長く務めると、一道を制し朝令に服従しない地方勢力を形成する可能性を憂慮したためであったという。⁽¹⁰⁵⁾ 漢陽から観察使の行列を共にしたのは、観察使の乗り物である双轎であり、行政権と司法権を表す教書と論書であり、観察使の儀仗である節と鉞、そして軍事権を象徴する司令旗と金鼓旗であった。赴任行列に華やかさを増す役割は司令旗と金鼓旗と対の関係にある吹打楽

隊である。吹打楽器は指揮・通信機能の道具として使用され、行進の際に行列全体を楽器の演奏でまとめ、賑やかであると同時に厳粛な行列を導いていたのであろう。

おわりに

朝鮮時代に制作された行列図を考察する中で、朝鮮時代行列図の作例は少ないという従来の認識とは裏腹に、様々な主題の図の中に行列図が描かれていたことが明らかになった。まず、国家行事を図で記録した班次図があった。班次図は文班次図と制作された場合もあるが、多くの班次図は行列図として描かれた。朝鮮王朝の半ば頃の17世紀から20世紀に至るまで王室の様々な行事を描いた行列班次図が数多く残っている。王室の行事を主題とした絵画制作は、その他にも班次図を彷彿させる屏風絵の存在があった。正祖の華城への行幸を描いた「華城陵行図」の第7扇と第8扇には、正祖の行幸行列が俯瞰視の構図で捉えられた大作であった。

また、官吏の行列を描く絵画の中には、中国や日本との外交行事に関わる屏風や画帖が存在する。日本の使臣を迎えるために東萊府から倭館の草梁までの長い行列を描いたものは、2点の作例が現存する。即ち、「東萊府使接倭使図」（国立中央博物館蔵）と「東萊府使接倭使図」（国立晋州博物館蔵）がそれである。また、中国との外交行事に関わる図像資料には、朝鮮王朝が明に派遣した謝恩奏請使一行の行列を描いた画帖がある。1624年、仁祖の王位継承の問題で明に派遣された使臣を描いた甲子航海朝天図は、国立中央博物館蔵の『航海朝天図』をはじめ、5点の異本が知られている。

膨大な作例が残る班次図の他に、多くの作例が残っているのが官吏赴任行列図である。官吏赴任を描く行列図の殆どは、不特定の官吏の赴任行列が多いが、中には、1581年に制作された尹斗寿（1533 - 1601）の延命儀式を描いた「留宮首陽館延命之図」や、申思運（1721-1801）の守令赴任の行列を描いた「安陵新迎図」のような、実存した人物を描いた作例が存在する。

いわゆる都市図の中には、平安監司（平安道観察使）の赴任を描き込んだ作例が少なくないが、平壤図と題される30以上に上る作例には平安道観察使の姿が登場する。平壤図に描かれる壮大な赴任行列は、観察使赴任に関わる普遍的な赴任行列のイメージとして定着し、「平壤図」の制作に定型化したパターンとして取り入れられた。「平安監司饗宴図」の中には、赴任饗宴の場面と共に大同江での船上の行列が描かれており、当代の人々に最も一般化された典型的な平安監司の赴任行列として受け入れられた。

伝金弘道筆『平生図』の「観察使赴任図」は、実存した人物の履歴を取り上げた図ではないという意味では、都市図の中の官吏赴任行列図に近似する。即ち、地方官の赴任の在り方を、当代の最も一般化された視点から絵画化したものとして、「観察使赴任図」の資料的意義がある。

「観察使赴任図」は、前陪裨将→教書と諭書→節と鉞→司令旗と金鼓旗→吹鼓手と細楽手→棍杖と朱杖→令旗→観察使の双轎→後陪裨将と監營の吏員、のような行列の構成を為している。国王の権威を象徴する教書と諭書、節と鉞が描かれ、赴任行列が観察使の赴任行列であることを明確にしている。また、軍事統帥権を有する観察使の威厳を表す司令旗も描き込まれている。申思運（1721-1801）の赴任行列を描いた「安陵新迎図」には実に様々な旗幟が登場するが、観察使の軍事統帥権を表す司令旗は、安陵守令の新迎行列には描かれていない。「観察使赴任図」に描かれている前陪と後陪裨将の

服飾と持ち物も史実通りである。

特に、教書筒と論書筒は、行列の主人公が国王の命令を受けて赴任する観察使としての威厳を象徴する機能を持つ。

都市図の中に、特に平壤図の中には、五里程で新迎を受けたあとの壮大な新迎行列図を描いたものが多い。『平生図』「観察使赴任図」は、官吏赴任行列の中では類例のない、観察使の「啓行行列」を描いている。⁽¹⁰⁶⁾ 即ち、観察使一行が都を經ち、赴任地の五里程に到達する前までの行列を描いた、数少ない図像資料であることが浮かび上がった。観察使の行列は都を經ち、赴任地までの長い路程を、吹鼓手と細楽手で構成する吹打楽隊の音楽を伴い、整然と行進していたのであろう。その行列は王權を代弁する地方最高の統治者であり、軍事統帥者としての観察使の姿を強く民に印象付けるものであったに違いない。

注

- (1) 崔誠希「19世紀平生図研究」(『美術史学』16、韓国、2002年)、金貞我「朝鮮時代『平生図』の成立と中人文化—「男子歌」・「남자가」(男兒歌)・「男兒歌」との相関關係を中心に—」(『非文字資料研究』16)、2018年。
- (2) 伝金弘道筆『慕堂洪履祥平生図』は、地方官赴任の図が「松都留守到任」と題されているが、慕堂洪履祥の一生と一致するものではなく、後代に付された題名であった。(金貞我、前掲論文、74 - 75頁)。しかも、その後制作された『慕堂洪履祥平生図』の多くの複本は「観察使赴任図」と題されている。図に見る幾つかの図様は観察使の行列を暗示するものであり、複本の題名のとおり「観察使赴任図」として取り上げることにする。
- (3) 例えば、李樹健『朝鮮時代地方行政史』(民音社、韓国、1989年)は、監司(観察使)の職制と機能について、柳希春『眉巖日記草』を分析した研究である。
- (4) 金貞我、中野泰、福田アジオ編『東アジア生活絵引—朝鮮風俗画編』(神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年)3人が共同研究を通して、「観察使赴任図」を分析した。図の解説は中野泰が担当した。98 - 99頁、参照。
- (5) 六反田豊「『班次図』とその周辺—朝鮮時代後期の行列図」(久留島浩編『描かれた行列—武士・異国・祭礼』、東京大学出版会、2015年)、371 - 391頁、参照。
- (6) 김지영「朝鮮後期儀軌班次圖의 基礎的研究」(『한국학보』31卷1号、2005年)、56頁。
- (7) 文班次図は、正祖が王室の構成員の儀仗を文字で羅列した「儀仗班次図」(1787年)を制作させ、実際の儀式に活用するようにした事例がある。また、19世紀前半の宴享儀軌は5件制作されたが、いずれも行列図ではなく、饗宴が開かれる式場の班次を文字で表した文班次図であった。1827年、王室の進爵(饗宴)の過程を記録した『慈慶殿進爵整礼儀軌』には6種の文班次図が収録されている。김종수「奎章閣所藏宴享関連儀軌」(『奎章閣所藏分類別儀軌解説集』(서울대학교 奎章閣、2005年))。
- (8) 박정혜「儀軌를 통해서 본 朝鮮時代의 画員」(『美術史研究』9号、韓国、1995年)、210-211頁。
- (9) 김지영 前掲論文、59頁。
- (10) 제송희「19世紀前半儀軌班次圖의 新傾向」(『美術史学研究』、韓国、2015年)、90頁。
- (11) 宗廟を改修する際、宗廟各室の神主(位牌)を慶徳宮に移し、奉安し、再び還奉(神主を元のところに戻して安置すること)するときの儀式。
- (12) 김지영 前掲論文、58頁。
- (13) 제송희「18世紀行列班次圖研究」(『美術史研究』273、韓国、2012年)、109頁。
- (14) 六反田豊、前掲書、375頁。「班次圖=行列圖とみなしてさしつかえない」とするが、嚴密な意味では班

次図＝行列図であるとはいえない。

- (15) 朴廷憲「朝鮮時代冊礼都監儀軌의 絵画史的研究」(『韓国文化』14、韓国、1993年)、545頁。
- (16) 제송희、前掲論文、「18世紀行列班次図研究」、125頁。
- (17) 제송희、前掲論文、「18世紀行列班次図研究」、106頁。
- (18) 제송희、前掲論文、「18世紀行列班次図研究」、106 - 107頁。
- (19) 国葬は、王室の儀礼の中では最も多くの官員が動員された。先代の国王の国葬を行いながら、同時に王権の交代が実現される儀式であるため、その手順は精緻に整備され、班次図を構成する行列も長い。제송희、前掲論文、「18世紀行列班次図研究」、103頁。
- (20) 김지영、前掲論文、83頁。
- (21) 김지영、前掲論文、88頁。
- (22) 김지영「朝鮮後期国王行次研究」(ソウル大学校大学院博士学位論文、2005年)、110頁。
- (23) 제송희、前掲論文、「18世紀行列班次図研究」、117頁。
- (24) 제송희、前掲論文、「18世紀行列班次図研究」、126頁。
- (25) 제송희、前掲論文、「19世紀前半儀軌班次図의 新傾向」、90頁。
- (26) 제송희、前掲論文、「19世紀前半儀軌班次図의 新傾向」、96 - 97頁。
- (27) 제송희、前掲論文、「19世紀前半儀軌班次図의 新傾向」、103 - 106頁。
- (28) 朝鮮時代王室の資料を文化財として指定する際に、その下限を1910年までとするのが一般的であるが、儀軌の場合、植民地時代の李王職で作成した皇族の国葬儀軌が現存するので、それを含めると1928年が下限になる。김문식「朝鮮時代史研究와 儀軌」(『朝鮮時代史學報』第79集、韓国、2016年)、123 - 124頁。
- (29) 박정혜『朝鮮時代宮中記録画研究』(일지사、2000年)、319頁。
- (30) 박정혜、前掲書、386頁。
- (31) 崔永禧は図に付随する表題の説明文「画師鄭謙齊元伯写」の存在を挙げ、鄭叡の筆によるものとする(崔永禧「鄭叡의『東萊府使接倭使図』」(『美術史學研究』129、130号、1976年)、168頁。なお、謙齊は鄭叡の号であり、元伯は子(成人になった男性の本名以外の呼称)である。
- (32) 崔永禧、前掲論文、168頁。
- (33) 정연식、「朝鮮後期 탈 것에 대한 規制의 变化」(『朝鮮後期 서울의 社会와 生活』、서울학연구소、1998年)、254頁。
- (34) 최영희、前掲論文、168 - 172頁。
- (35) 沈玟廷「『東萊府使接倭使図』를 통해서 본 倭使 접대」(『東北亞文化研究』11、韓国)、163 - 164頁。晋州博物館本は沈玟廷により紹介された。
- (36) 作例の紹介については、展覧会図録『中国使行을 다녀온 画家들』(国立中央博物館、韓国、2011年)、鄭恩主「백길로 간 中国、甲子航海朝天図」(『文献解釈』26、韓国、2001年)、鄭恩主『朝鮮時代使行記録画：옛 그림으로 읽는 韓中關係史』(사회평론、2012年)を参照。
- (37) 최은정「甲子(1624年)航海朝天図研究」、ソウル大学校大学院碩士學位論文、2005年)、2 - 3頁。
- (38) 최은정、前掲論文、10頁。
- (39) 鄭恩主「明清交代期对明海路使行記録画研究」(『明清史研究』、韓国、2007年)、196頁。
- (40) 鄭恩主、前掲論文、「明清交代期对明海路使行記録画研究」、201頁。
- (41) 鄭恩主、前掲論文、「백길로 간 中国、甲子航海朝天図」、125 - 126頁。
- (42) 정연식、前掲論文、250 - 251頁。
- (43) 鄭恩主、前掲論文「明清交代期对明海路使行記録画研究」、207頁。
- (44) 박태근「燕行図기행」1 - 13、『韓国日報』2000年1月10日～4月10日。
- (45) 鄭恩主、前掲論文「明清交代期对明海路使行記録画研究」、216頁。
- (46) 이대화「朝鮮後期守令赴任行列에 대한 一考—『安陵新迎圖』를 中心으로—」(『歷史民俗學』18、韓国、2004年)、197 - 198頁。

- (47) 박정애 「19世紀連幅実景図屏風の 流行과 作画傾向」(『東亜大学校석당博物館』、2006年)、288 - 289頁。
六反田豊は16世紀以前に制作された行列図はないと断定するが(六反田豊、前掲書、372頁)、16世紀に制作された行列図は確認できる。
- (48) 여상진 「18世紀忠清監司의 監營處및 道内邑治施設利用—交龜、巡歷및 行禮를 中心으로—」(『韓國産學技術學會論文誌』、韓國、2008年)、148頁。
- (49) 송혜진 「피어보디·에섹스博物館所藏『平壤監司饗宴圖』 圖像의 再解釈」(『韓國音樂研究』44輯、2008年)、76頁。
- (50) 송혜진、前掲論文、74 - 78頁。
- (51) 진준현、「平壤圖屏風」(『自然과 文明의 調和』第54卷、第5号、2006年)、114頁。
- (52) 金貞我「朝鮮時代の風俗画資料と絵引編纂」(『東アジア生活絵引—朝鮮風俗画編』、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年)、127頁。
- (53) 金貞我、前掲論文「朝鮮時代『平生圖』の成立と中人文化—「男子歌」・「남자가」(「男子歌」)・「男兒歌」との相関關係を中心に—」、90 - 92頁。
- (54) 金貞我、中野泰、福田アジオ、前掲書、98 - 99頁参照。
- (55) 李義權、「朝鮮後期地方統治行政研究」(全南大学校大学院博士学位論文、韓國、1989年)、34頁
- (56) 表衣の一種で、上衣下裳式の戎服(軍服)。帖裏については、柳喜卿『韓國服飾史研究』(梨花女子大学校出版部、2002年)、285 - 287頁を参照。
- (57) 李義權、前掲論文、35 - 36頁。
- (58) 김정자『韓國軍服變遷史研究』(민속원、1998年)、288 - 289頁。
- (59) 김정자、前掲書、289頁。
- (60) 『世宗實錄』世宗7年4月庚子「傳旨兵曹、今後門外行幸時、侍衛軍士、竝令着帖裏」、김정자、前掲書、275頁。
- (61) 孫敬子、任榮子「檀園金弘道の平生圖屏風に 나타난 人物들의 服飾에 關한 考察—世宗博物館所藏品—」(『服飾』9、韓國、1985年)、14 - 15頁。
- (62) 金英淑編著『韓國服飾文化辭典』(東方出版、韓國、2008年)、366頁。
- (63) 孫敬子、任榮子、前掲論文、14 - 15頁。
- (64) 金英淑編著、前掲書、314頁。
- (65) 김정자、前掲書、285頁。
- (66) 노인환 「朝鮮時代觀察使敎書와 諭書의 文書行政과 運用」(『古文書研究』、韓國、2016年)、289頁。
- (67) 노인환、前掲論文、289頁。
- (68) 노인환、前掲論文、291頁。
- (69) 노인환、前掲論文、291頁。
- (70) 여상진、前掲論文、146 - 147頁。
- (71) 여상진、前掲論文、147頁。
- (72) 노인환、前掲論文、306頁。
- (73) 여상진、前掲論文、147 - 148頁。
- (74) 道袍の後身の裾の間に当てる布。金英淑編著、前掲書、337頁。
- (75) 柳喜卿、前掲書、371頁。
- (76) 笠の飾り紐。金玉、珊瑚、水晶などを用いる。柳喜卿、前掲書、360頁。
- (77) 吹鼓手と細樂手を含める軍樂隊の意味として「吹打樂隊」と称する。이숙희 「行樂演奏樂隊의 種類와 性格—宮中·官衙·軍營을 中心으로—」(『韓國音樂研究』35、2004年)、159頁。
- (78) 李樹健、前掲書、199頁。
- (79) 『東アジア生活絵引—朝鮮風俗画編』では槍飾り(纛)と名称を与えた。99頁を参照。제송희 「朝鮮後期

- 官員行列の視覚化様相과 特徴」(『精神文化研究』第39巻第3号、2016年)では、節と鉞の説明が逆になっていた。10頁を参照。
- (80) 제송희, 前掲論文「朝鮮後期官員行列의 視覚化様相과 特徴」、10 - 11頁。
- (81) 『東アジア生活絵引—朝鮮風俗画編』では幡(高招旗)と名称を与えた。
- (82) 이대화, 前掲論文、203頁。
- (83) 이숙희, 「朝鮮後期吹鼓手の機能」(『韓国音楽史学報』29、韓国、2002年)478 - 479頁。同著者、『朝鮮後期軍營楽隊』(태학사、韓国、2007年)を参照した。
- (84) 이숙희, 前掲論文「行楽演奏楽隊種類性格—宮中・官衙・軍營中心—」、159頁。
- (85) 이숙희, 前掲論文「行楽演奏楽隊種類性格—宮中・官衙・軍營中心—」、477頁。
- (86) 이숙희, 前掲論文「行楽演奏楽隊種類性格—宮中・官衙・軍營中心—」、167頁。
- (87) 이숙희, 前掲論文「行楽演奏楽隊種類性格—宮中・官衙・軍營中心—」、167頁。各楽器についての解説は、이숙희, 前掲論文、「朝鮮後期吹鼓手の機能」、481 - 484頁)を参照。
- (88) 우에무라 유키오 『『宣庁日記』를 통해 본 内吹의 様相—正祖・純祖대를 중심으로—』(『東洋音楽』24巻、韓国、2002年)、131 - 132頁。
- (89) 「吹鼓手戴戰笠着黃號衣佩劍持吹打各器」『万機要覽』軍政編二、訓練都監、服着。
- (90) 김정자, 前掲書、312頁。
- (91) 정연식, 前掲論文、249 - 250頁。
- (92) 정연식, 前掲論文、254頁。
- (93) 觀察使及從二品以上官、城外則乘双馬轎、曾經承旨者、雖守令許乘、義州東萊則以辺臣亦許乘『大典会通』「礼典儀仗」。정연식, 前掲論文、182頁。
- (94) 金赫「朝鮮後期守令의 赴任儀礼—『願齋乱藁』를 中心으로—」(『朝鮮時代史学報』22、韓国、2008年)、157、173頁。
- (95) 제송희「朝鮮王室의 가마研究」(『韓国文化』70)、271頁。
- (96) 『東アジア生活絵引—朝鮮風俗画編』、80 - 81頁、16、帽子飾り(烏銅笠飾)を参照。
- (97) 김정자, 前掲書、288頁。
- (98) 觀察使の任命及び教書と論書、下直肅拜については、노인환, 前掲論文、291、300 - 302頁を参照した。
- (99) 『牧民心書』「赴任六条」。
- (100) 노인환, 前掲論文、306頁。赴任地の營吏が漢陽に新官の官吏を出向かうことを指し、また、赴任地の監營から5里離れたところにある客舎に到着した新官の官吏を、官衙の軍卒及び營吏、妓女などが出向かうことも新迎という。
- (101) 이대화, 前掲論文、209 - 210頁。
- (102) 『李春風伝』(金起東編『筆写本古典小説全集』巻6、亜細亜文化社、韓国)、532 - 533頁。
- (103) 『李春風伝』、前掲書、533頁。
- (104) 『李春風伝』、前掲書、534頁。
- (105) 李源鈞、「朝鮮時代地方官의 交遞에 관한 研究」(東亜大学大学院博士論文、1987年)14頁。
- (106) 『牧民心書』「赴任六条」、啓行。